
リターナ

如月由縁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リターナ

【Nコード】

N1399N

【作者名】

如月由縁

【あらすじ】

西暦3425年。

地球はナノマシンの集合体であるロボット（ナノロイド）によって管理され、地上にはナノロイドによって製作された人間が暮らしていた。

その地球にとある事件がおこる。

毎日のように宇宙船が空に現れて人間を攫っていき、代わりに石像のように硬化して無反応の人間を地上に置き去りにし始めたのだ。宇宙船に置き去りにされた人間はナノロイドによってリターナと

名づけられ、人間はナノロイドにリターナに対してある事をする事を禁じられる。

物語はそんなリターナを高尾・フレサンジ・三太が拾ったところから始まる。

前書きという名の注意書き

第一部一節の前書きに入れようとしたら本編より長かったから前書きにしてみました。

以下注意書きとか色々。

原稿読み返してて気が付きましたが多少B Lっぽい要素があります。

(生物的な特徴なのでB Lカテゴリにはいたしませんのでご了承ください)

またタグにも入れましたがこの作品はバッドエンドに終わります。すでに書きあがっている作品なので結末は確定しています。

苦手な方はご注意くださいませ。

とは言いましたが、作者としてはこれはバッドエンドとは思ってなかったりもします。

詳しくは最終話の後に書く予定の後書きにて。

ちなみにこの作品は53節で終わります。

この前書き+完結した後に後書きを入れようと思っているので最終的には一応55節かな？

一話一話は短かったりそれなりに長かったりと結構バラつきがありますが、話の構成上ご了承下さい。

ご意見・ご感想お待ちしております。

それでは物語をお楽しみくださいませ。

~~~~こっからは蛇足~~~~

第四部辺りからは我ながらこいつ等どうなんだ？ と思うような違和感を感じる描写が結構あったりしますが、演出と考えていただければ幸いです。これはもう6年前に書いた作品で、当時の感情や思惑を思い出すと修正も出来なかったので。適当に流していただければと思います。直さない方が個人的な完成度としては高いので直したくないという事もあります。(ハッピーエンドにもできるけど、無理やりそうすると物語がすごい薄っぺらくなるなあとかも含む)なんでもできる超人や、完璧な頭脳を持つ天才や、奇跡的な間の良さを持つ才人を出してないからこつなるのは当然だなあ的な意味で)。

こつという前書きを書かねばならない時点で駄文といわざるを得ない。

## 第一部 高尾と八子

「あなたは本当にその計画を実行に移す気なのか？」

「ああ、そうだ。これはもう決めた事だ」

「あなたは僕の話聞いただろ？ それなのに、あなたはあなたのエゴのためだけに、本当にそんな事をする気なのか？」

「確かに、君の言い分はわかる。私も君の意見はもつともだと思っし、できれば尊重したい。

しかし、だからといって君はあの根性無しどもの横暴を許しておく気なのか？

あの地表に住む哀れな同胞達をそのまま放置しておけというのか？ 私にはそんな事はできない。

それに、私は単にアレの製作者の責任というだけではなく、一人の人間として、これ以上アレの横暴を許す事などできそうにはないのだよ」

「だったら、彼等はどうなるんだ！？ 彼等はこの環境に生まれ、彼等なりのやり方で安定しているんだ。

それなのに、こちらの一方的な言い分で彼等の全てを変えてしまう権利が僕達にあるのか？

彼等なりの幸せを奪う権利が僕たちにあるのか？

君は、それが正しいと思うのか？」

「それは……確かに君の言い分が正しいのは認めよう。

そう、確かに、君の言い分はもつともなのだ。

彼等には自らの生活を全うする権利があるし、彼らが望むならばそ

れは阻害されるべきではない。

私達から見れば明らかに不当な状況に置かれているにも拘らず、それを自らが不幸と思わずに、ただ満たされているというならば尚のことだ。

だが、我々にはこの状況を正すべき大儀がある。

……確かに、もはや我々はこの星に用はない。

あの出来損ないどももクズなりに働いたようだし、褒美としてこのまま干渉を行わずに放置するというのも一つの手ではあった。

しかし、アレは明らかにやりすぎだ。

アレの行った事を正さないなど論外だ。

それは君だつて理解できているはずだ？」

「それは……けど!!」

「まあ落ち着きたまえ。

アレの暴挙を許すことはできない。

とはいえ、君の意見は正しい。

正しいからこそ困ったものだ……さて、どうするべきか……

……そうだな。

では、こうしよう。

それは、彼等自身に決めさせるのだ。

弟よ、一つ賭けをしよう。

君と私で、非常に不遜な賭けを。

あの地表に住む人々の運命を賭けた賭けを……」

## 第一部 高尾と八子（後書き）

8 / 12 : この節の前書き後書きを削除。「前書き」という名の注意書き」として第一節に移動。



三千四百二十六年目の十一月の七日

キリストが生まれてから三千四百二十六年目の十一月の七日。

その日、ハチは珍しい事に道端で一人の女の子を拾った。

とは言っても今の時代、道端で女の子を拾う事自体は別に珍しい事じゃない。

女の子も男の子も、今の時代では道端にいくらでも落ちているのだ。

宇宙人の宇宙船が毎日現れては人間をさらって行って、その代わりとっては何だけれども、帰還者を道端に捨てていく。

そして人間は寂しがり屋だから帰還者を拾って帰るのだ。

それは本当は違法な事だけれども、でも、それは機械の人間が決めた事だから、人間は誰も気にしていない。

だから、道端で女の子を拾う事自体は別に珍しい事じゃあないのだ。

じゃあ、なんでハチが女の子を拾った事がそんなに珍しいのかと  
いうと、それは、ハチも女の子と同じ、帰還者なのだ。

## 八子とナナ

帰還者は普通なら何も感じないし何も考えないし何も行動しない。

それは道端に落ちている帰還者も、人間に拾われた帰還者も同じ事なんだけれども、高尾に色んな事を教えてもらった八子だけは、少しだけ他の帰還者とは違うのだ。

八子はあまり感じられないしあまり考えられないしあまり行動しない。

けど、少しだけ感じるし、少しだけ考えられるし、少しだけ行動できるのだ。

帰還者は普通、帰還者を拾わない。

それは八子も同じ事で、いつもなら帰還者を拾おうとは思わないだろうし、これから先も帰還者を拾おうとは思わないだろう。

じゃあなんでこの時は女の子を拾おうと思ったのかというと、それは多分、女の子の黒い目と髪がとても綺麗だったからからだと思う。

八子はキリストが生まれてから三千四百二十五年目の八月の八日に拾われた。

だから八子の名前は八子なのだ。

今日はキリストが生まれてから三千四百二十六年目の十一月の七

日だ。

だから八手はこの女の子の名前はナナに決めた。

## 高尾の家

ハチが高尾の家に帰ると、そこには椅子に座って本を読んでいる高尾がいた。

高尾の名前は高尾・フレサンジ・三太。

製造番号はNH 599999。

成人した年は七才。

人間の製造は十四年前に中止になったから、多分この世界で最年少の人間。

「その子は？」

高尾はナナを見てそう言った。

「ナナ」

「え？ …… ああ、名前をつけたんだね」

「そう」

「拾ってきたの？」

「そう」

「そうか……それじゃ、ハチが拾ってきたんなら、その子の面倒は

八チが見るんだよ」

八チは高尾に拾われた。

八チは高尾に色んな事を教えてもらった。

ナナは八チが拾った。

だから、ナナに色んな事を教えるのは、多分八チがする事なのだろう。

だから、八チは高尾に「分かった」と答えた。

お勉強　〜この世界について〜

高尾は八子を拾った。

八子は高尾に色々な事を教わった。

八子はナナを拾った。

だから、ナナを拾った八子はナナに色々な事を教えようと思う。

まず、今日はキリストが生まれてから三千四百二十六年目の十一月の七日だ。

キリストが生まれた年から一年引いたものが西暦というもので、それを百年で割って一を足したものが世紀というものらしいのだ。

だから今日はキリストが生まれてから三千四百二十六年目で、西暦三千四百二十五年で、三十五世紀なのだ。

八子はキリストも西暦も世紀も良く分からないし、それに何の意味があるのかも分からない。

けれども、そういうものらしいのだ。

高尾が言うには『もうこの世界には純粹な人間はいない』らしいのだ。

それがどうしてなのかというのと、高尾が言うには『こういう事らしい。』

『僕達は保護者に製造された人間で、純粋な人間は八百年前にはこの地球の地上からも地下からも、完全に姿を消してしまっただ』

『今から千年前、二十五世紀の始めには地上は生物が住めないほどに荒廃してしまつて、一部は新天地を求めて宇宙に旅立つたらしいけど、大多数の人間は荒廃してしまつた地上を保護者達に再生するように命じて、地下に潜つただ』

『地下に潜つた純粋な人間は、けど、それで滅びてしまつたわけではなく、その後も科学的に発展していつて、ある時、扉を見つけたらしいんだ』

『扉といつても物質的な意味じゃない。』

僕にも良く分らないんだけど、それは多分、違う次元への、一種の力場のようなものなんだと思う。

それは、無限の広さと無限のエネルギーに満ちた世界に繋がっていったらしい。純粋な人間は当然そこに移り住んだ』

『多分、純粋な人間も最初はこの場所に帰ってくる気があつただと思う。』

純粋な人間は相変わらず保護者達にこの場所を再生するように命じたままだったし、再生が終了した時には呼び出すようにも命じた。

けれども、結局のところ純粋な人間は帰つては来なかつた。それから五百年が過ぎ、地上を再び人が住める環境に再生した保護者は純粋な人間にそれを報告しようとしたんだけど、返事は無かつたんだ』

『多分、扉の先の世界の方が住み心地が良かつたんだろうね。とに』

かく、五十年の間呼び続けても、純粋な人間は保護者達に応える事はなかったんだ』

『その事態に保護者達は困った。

なぜなら、人間がいなくなってしまうたら保護者達の存在意義はなくなってしまうからね。

保護者達は純粋な人間と連絡をとる事を諦め、それから二百年の間、悩み続けた。

そして、保護者達は一つの結論を出したんだ。その結果が僕達だ』

『保護者達はこう考えた。人間がないのならば、自分達で作ればいいのだ、と。

保護者達は万が一の事態に備えて保存されていた純粋な人間の遺伝子を組み合わせ、文字通り人間を製造したんだ。

けど、保護者達のその実験は失敗した。

保護者達が製造した僕達には欠陥があったんだ。

保護者達はその欠陥を直そうと僕達を改良したけれども、その改良も失敗したんだ』

『結局、僕達の欠陥は直らなかった。

保護者達は僕達を直す事を諦め、十四年前の僕達の代を最後に人間の生産を止めた』

『僕達は保護者達によって完全に管理されている。

とはいっても、保護者達は人間に逆らう事はできない』

『僕達は一人で暮らしていけるようになるまで保護者によって保護区で育てられ、成人してからはこの管理区で暮らすようになる』

『この管理区では僕達はどんな行動をするのも自由だし、どんな行



為によっても罰せられることは無い。

ここでいう管理というのは身の回りの事で、衣食住の全ては保護者達によって完全に管理されている』

『保護者達は僕達の行動を完全に把握している。

どこから見ているのかは分からないけれども、例え迷子になっても必ず見つけ出してくれるし、死にそんな怪我を負っても生きてさえいればすぐに治してくれる』

『保護者については良く分からない。

保護者達は僕達に対して大抵の情報は公開しているけれども、純粋な人間の遺伝子情報と保護者に関しての事だけは規制されているんだ。

だから保護者については微細な機械の集合体からなる機械生命体という事くらいしか分からない。その規模も組織形態も何もかも』

『その情報制限以外に保護者が僕達に干渉する事は無い。

ただ一つだけ、最近になって命令ではなくお願いされた事以外は。それは君達リターナを拾わないで欲しいという事だ』

『けど、僕達は保護者達の言う事を気にしたりしない。

だから僕は八手を拾ったし、八手に教育もした』

高尾から聞いたこの世界についてのことはこれで全部。

だから、八手はこれ以上の事を知らない。

## 高尾の日記・その一

今日は八チがリターナを拾ってきた。

それ自体が驚くべき事だったけれども、僕は八チから話を聞いて二度驚かされてしまった。

なんと、八チは拾ってきたリターナに名前まで付けていたのだ。

八チは拾ってきたリターナにナナと名付けていた。

そしてその命名方式に、僕は思い当たるものがある。

今日は十一月の七日だ。

だから八チは七日という数字からとって拾ってきたリターナにナナという名前を付けたのだろう。

この命名方式は僕が八チに名前をつけた時に使ったものだ。

つまり、八チはその事を覚えていて、それを理解した上で拾ってきたリターナに名前をつけたのだろう。

ここで重要な点は二つある。

重要な点のその一はその命名方式　八チは拾ってきたリターナに、僕のような二つの苗字と一つの名前からなる姓名を付けずに自分と同じように日付からなる単一の名前を付けた　だ。

これには二つの事が考えられる。

一つは僕が八子を拾ったように、八子もナナを拾ったと考えている場合。

この場合、八子は自分を僕達と同じものだとして考えている事になる。

もう一つは八子がナナを同族として考えている場合。

この場合は、八子は自分を僕達とは違うものだとして考えている事になる。

この差は、見逃してしまえば小さな問題のように見えるかもしれないが、実際にはリターナというものの根底を決定づける実に大きな問題である。

だが、今の段階ではこの問題についてはひとまず保留にしておく事にした方がいいだろう。

その理由としては、なによりまだ資料が少ないし、これは特に慎重に扱うべき問題だからだ。

この問題については特に急ぐ事もないだろう。

今後の観察によってはつきりしてくるはずだ。

重要な点のその二は　これこそが僕にとって一番重要な点である　リターナを拾ってきてそれに名前を付けたという一連の八子の行動全てである。

確かに八手は今までも一人で出歩いたりしていたが、それは生まれたばかりの赤子が自分が何をしているのかも分からずにただ闇雲に手を振り回しているようなものだった。

だが、今度の八手の行動についてはそれまでとは明らかに一線を画す行動だ。

八手は自分で考えてリターナを拾ってきて名前を付けた。

それはつまり、八手は自分一人で考えて、自分一人で行動ができるようになったという事である。

言つなればそれは、八手に自我が芽生えたという事だ。

これで僕の実験は第三段階を終了した事になる。

……僕は八手に一つだけ嘘をついている。

それは保護者のお願いが『リターナを捨わないで欲しい』というものではなく、『リターナに知恵を与えないで欲しい』というものなのだという事だ。

保護者がお願いをするまでもなく、それ以前からそんな事を考える奴は僕達の中にはいなかっただろうし、今でも多分ないだろう。

ただ、僕を除いては、だ。

僕の周りにいる人はリターナを僕達の同等の存在だとみなしている人はいない。

事実、何をしてもまるで無反応のリターナを、みんなはまるで動かないペットか、もしくは部屋の飾りのように扱っている。

僕も以前はリターナが僕達と同等の存在だと思った事も無かつたし、そんな事は考えにも及ばなかつた。

だから、保護者のそのお願いは明らかかな過ちと言えるだろう。

なぜなら、そのお願いによってリターナが知恵をつけ、僕達と同等の存在になる可能性がある僕に知らせてしまったからだ。

僕は、保護者のお願いに興味をかきたてられた。

なぜ、保護者はリターナが知恵をつけることを恐れているのか。

そして、リターナが知恵を獲得した時、一体どうなるのか。

だから僕は保護者がそのお願いをしてすぐに八手を拾って来て教育を施した。

拾ってきたばかりの八手はまさに銅像そのもので、教育は困難を極めた。

いくなれば拾ったばかりのリターナは、赤子にすら劣る存在で、生物とすら呼べないような状態だ。

生き物とは極めて簡単に言えば外部の刺激に反応し、本能または理性によって対処する存在の事であり、拾ったばかりのリターナは外部からの刺激にいかなる反応もしないものなのだ。

だから僕は、まず八手に反応を獲得させる事から始めた。

僕はまず徹底的に八手の身体を動かす、肉体の働きについて八手に文字通り身をもって教え込んだ。

すると、三ヶ月もそんな事をしていくうちに、八手は反射的なものだが反応を獲得する事ができた。

次に僕は肉体の働きについて教え込む事に平行して八手に様々な事 言葉や習慣やこの世界に関する知識等 を教え込んだ。

そして八手を拾ってから一年もした頃には 今から三ヶ月前の事になる 昨日までの八手のように一人で外を出歩けるまでに成長したのだ。

反応を獲得する事が第一段階。

知識を獲得する事が第二段階。

そして自我の芽生えによって僕の実験は第三段階までを終了した。

反応を獲得し、知識を獲得し、そして今日になって、八手はとうとう自我を獲得した。

これで八手はようやく僕達と同等の存在になったのだ。

八手は今日、リターナを拾ってきた。

予定には無い行動だが、これによって僕の研究に結果が出るのは

早まるだろう。

人間は、他人にものを教える事で自身を飛躍的に成長させていくものである。

ナナを育てる事によって、八子の成長は加速していくだろう。

もはや、僕はもうそれを観察しているだけでいいのだ。

保護者が何を恐れているのか。

もうすぐ僕はそれを知る事ができるのだ。

## 瞳の中に映るもの

ハチはナナがとっても可愛いと思うのだ。

短い綺麗な黒い髪も、少し膨れた丸いほっぺも、少し低めの鼻も、つんと突き出た唇も。

ハチはナナの全てがとっても可愛いと思うのだ。

ハチがナナの目を覗いてみると、黒い虚ろな瞳にはハチの姿が映っていた。

ハチはナナの瞳が見えているし、ナナの瞳にはハチが映っている。

けど、ナナはハチの事が見えてないような気がするし、ハチの瞳にナナが映っていても、ナナはそれを見ていないと思う。

ハチはナナにハチを見て欲しい。

だからハチはハチの両目をナナの両目に合わせてじっとナナの瞳を覗き込んだ。

こうすれば絶対にハチの事をナナが見ているはずなのだ。

ハチはナナの両目をじっと見た。

すると、なんだかハチは心臓が早くなったような気がしてきた。

ハチは心臓が早くなって、顔が熱くなって、息が苦しくなってきた。



た。

なんだかとっても苦しくて、なんだかとっても落ち着かなくて、八チはナナの両目から八チの両目を下に向かって引き離した。

そうしたら、今度は八チの両目にナナの唇が合った。

すると、心臓はなぜだかもっと早くなった気がするし、顔ももっと厚くなってきた気がするし、だんだん息も切れてきた。

八チは、なんだかナナの小さな唇に八チの大きな唇を合わせてみたくなった。

だけれども、それはなんだかとてもいけないことのような気がするたのでやっぱり止めておいた。

それでもナナを見ていたら、八チはやっぱりナナの小さな唇に八チの大きな唇を合わせたくなってきた。

八チはよく分からなかった。

どうしてそうなるのか、よく分からなかった。

ナナを見ていたら、八チはナナの小さな唇に八チの大きな唇を合わせたくなってしまふのだ。

八チは、ナナの小さな唇に八チの大きな唇を合わせるのとはとてもいけない事のような気がする。

だから、八チはナナに背中を向けて、ナナを見ないようにした。

そうしたら、どうしてかわからないけれども、心臓が早くなったのも治ったし、顔が熱くなったのも治ったし、息が速くなったのも治った。

ハチはよく分からなかった。

何が分からないのか、それもよく分からなかった。

## 高尾の日記・その二

三千四百二十六年十一月九日

今日は僕の家でケイとクリスの二人が遊びに来た。

浅羽・袴田・慶太郎。

クリステイナ・リンドール・ラッセン。

僕が一番身近な二人。

僕が一番大切な二人。

浅羽・袴田・慶太郎は僕の最も古い友達。

僕が七才で成人し、保護区から離れて初めてこの地の土を踏んだ日に、僕は僕よりも早くただ一人だけでこの地に住んでいたケイと出会った。

クリステイナ・リンドール・ラッセンは僕の最も新しい友達。

僕がこの地に来て五年が経ち、保護区からこの地に来る者も絶えて久しくなった頃に、思い出したかのように最後にこの地にやって来たのが彼女だった。

この二年間、僕達三人は多くの時間を共に過ごしてきた。

この地には成人して保護区から出てきた人間が多く住んでいるけ

れども、僕達三人は他の誰よりも三人でいる事を望んできた。

僕達は仲の良い友人だった。

少なくともつい最近までは。

だが、いつの頃からか僕達の関係は歪み、少し様子の違うものになってしまっていた。

クリスは僕の家に来ると、いつも僕の気を引こうとする。

けれども、僕の意識はそんなクリスを疎ましくさえ思い、ケイの方へと流れていく。

恐らく、クリスは僕の事が好きなのだろう。

だが、僕はケイに惹かれているのだ。

それが最近僕達の間を生じた歪みの正体。

思春期を迎えて、僕達は互いに友情以上の感情を芽生えさせている。

だけど、この感情は互いに一方通行のものだ。

クリスは僕に惹かれ、僕はケイに惹かれている。だが、ケイは決して他人に対し友情以上の感情を抱く事は無いのだ。

この僕達の関係は、僕達の欠陥部分を如実に表している。

保護者達に製造された僕達は、性が三つに分かれてしまったのだ。

女性と男性、そして男性ではあるが男性ではない中性とでも呼ぶべき三つの性に。

女性は男性に惹かれ、男性は中性に引かれる。そして中性は誰に対しても友情以上の感情を抱く事は無いのだ。

決して報われる事の無いこの関係。

だが、僕達がこの関係に絶望する事は無い。

なぜなら、確かに自分の想い人が自分のものになる事は無いが、同じように自分の想い人が他人のものになる事は決してないからだ。

諦めにも似たこの安心感は、しかし一種の救いでもある。

保護者達によって改良され、怒りも闘争心も、嫉妬心さえも失っている僕達が、もし旧来のような男女の関係の中にあつたならば、僕達の何割かは満たされぬ思いに苦しみ、しかし変える事のできないに現実に思い悩み、最後には破滅する事になるだろう。

……けど、最近はこの考えも自信を失ってきている。

確かにこのシステムは全員の諦めによって上手く成り立っている。

けど、決して報われないと考えると、僕はたまに切なくて気が狂いそうになるのだ。

そしてこの僕と同じ感情をクリスもまた僕に対して感じているの

だとしたら、それはとても悲しい事に思える。

……多分これは一時的な事なのだろう。そうでないならば僕達より年上の他の管理区は成り立っていないはずだ。

けど、もしそれが本当でないとすれば……

これもまた、僕の研究課題に付け加えるべきものなのかもしれない。  
い。

## お気に入り場所

八手は晴れた空が好きだ。

高尾は晴れた空があんまり好きじゃないみたいだけれども、それでも曇った空よりは好きらしい。

八手は晴れた空が好きだ。八手は晴れた空の下を歩いたり、木の葉の影を見たり、晴れた空の下で寝転がったりするのが好きなのだ。

高尾は晴れた空があんまり好きじゃないみたいだけれども、それでも晴れた空の下を歩いたり、木陰に座って本を読んだり、空の雲を眺めたりするのは好きらしい。

今日は晴れの日だ。

八手は晴れた空が好きだ。

高尾も晴れた空が嫌いじゃない。

だから今日は高尾とナナと一緒に三人でサンポに出かける事にした。

サンポの場所は決まっていた。

八手のお気に入り場所は昔の建物を越えた先の、木がいっぱいある湖がある場所なのだ。

八手のお気に入り場所につくと、高尾は木陰で本を読み始めた。

ナナはまだ何もできないから、だから高尾の横で座っている。

だから八チはいつものように一人で湖の前に立ってじっと湖の中を見つめる事にした。

湖の前に立つと、ずっと高い場所にいるみたいで八チは好きだ。

湖の中を覗くと昔の背の高い建物がいっぱいあって、なんだか不思議で八チは好きなのだ。

なにが不思議か分からないけれども、とても不思議な気がするから、だから八チは好きなのだ。



### 高尾の日記・その三

今日は八チとナナと一緒に八チのお気に入りの場所に行った。

八チとはよくその場所に行っているけれども、今日はナナも一緒だったから何か起こるかと思ったけれども、ナナは僕の側でじっとしていたし、八チはいつもどおりじつと湖の底の古代建造物を見ていたし、特にいつもと変わるところは無かった。

つまり今日は何の変哲も無い平和な一日だったと言う事だ。

ここまで書いて思ったけれども、今日の日記は本当に日記らしい日記のような気がする。

最近の僕の日記は僕の研究ノートみたいになっていたから、前のページと見比べて自分でもちょっと笑ってしまった。

けどまあ、たまにはそれもいいかもしれない。

でも、これだけだとなんだから、やっぱり少しだけ今までの事をまとめておこう。

・ナナが来てから一週間のまとめ

- 1．八チがナナの世話をするようになった。
- 2．八チの知性は変わらず。

3・ナナは自力で動けるようになった。

4・ナナは未だ喋らない。

特筆すべきは3だろう。ナナはここに来てたったの三日で自力で動くようになったのだ。

考えられる原因は、八チは同族だから身体の動かし方を教えるのが上手かったのと、ナナはまだ放棄されたばかりで身体が固まっていなかったせいだろう。

僕が八チを連れて来た時、八チの身体はガチガチに固まっていた。

原理は分からないが、リターナは動かなかつたり肉体的な危機に陥ったりすると身体が金属のように硬くなって一種の冬眠状態に入るようなのだ。

話を戻すと、ナナが三日で自力で動くようになったのは驚いたけれども、ナナの変化はそこで止まってしまった。未だに一言も言葉を喋らないし相変わらず目は虚ろなまま焦点が合っていない。

八チが言葉を喋った時は特に気になることはなかったのだが、喋る様になるにはなにか刺激が必要なのかもしれない。

けど、僕から試すよりも八チに任せた方が楽しそうだから、しばらくはこのまま観察を続けるとしよう。

以上、本日の日記終了。

## 月の夜

ハチは月がとてもキレイだと思う。

高尾も月を見るのは好きみたいだ。

ナナはよく分からないけど、きっと好きだと思う。

今日はとても月がキレイな夜だ。

だからお気に入りの場所から高尾の家へ帰る時、ハチもナナも高尾もずっと空を見上げて月を見ていた。

昔の建物がある場所は石ころがいつぱい落ちてて明かりがないと足元が危ないけれども、けれども明かりをつけると月がキレイに見えるから、だからハチもナナも高尾も明かりもつけなくて月明かりに照らされた道をずっと月を見て歩いていた。

月を見ていたら、昔の背の高い建物の上にクリスが見えた。

クリスの名前はクリスティーナ・リンドール・ラッセン。

製造番号はNH 53879。

成人した年は十二才。

もっとも遅く成人した高尾の友達。

クリスは昔の背の高い建物の上で月を見ていた。

高いところに行けば月はもつときれいに見えると思う。

だから八チもナナも高尾も、なにも言わずに昔の背の高い建物を登る事にした。

クリスの場所につくと、クリスはこっちを少しだけ見たけれども、すぐに月を見はじめた。

高尾もクリスの隣に立って月を見はじめた。

ナナはずっと月を見ている。

だから八チもなにも言わずに月を見ることにした。

今日は月がキレイな夜だ。

だから八チもナナも高尾もクリスもずっと月を見ていてその事に気がつかなかった。

月を見ていたら、なにかが割れるような大きな音がして地面がななめになった。

そうしたら地面が割れはじめて、昔の背の高い建物から投げ出されそうになった。

八チもナナも帰還者だからこのまま地面に落ちても大丈夫だと思う。

けど、高尾もクリスも帰還者じゃないから、このまま地面に落ち

たら駄目だと思う。

八手は高尾もクリスもいなくなってしまうのは嫌だと思う。

だから、八手は高尾を背負って地面から飛び降りた。

ナナもクリスを背負って地面から飛び降りる。

空を飛ぶのは気持ちが悪かった。

高尾もクリスも怖がって大きな声を出しているけれども、昔の背の高い建物の破片が周りに止まって見えて、なんだか空に浮いているように思えて気持ちが悪かった。

けど、下の地面はすぐに近づいてきて、すぐに地面に落ちてしまった。

地面に落ちたら、足が地面にめり込んでしまった。

足が地面にめり込んで、足が壊れないように硬くなってしまった。

空から、大きな昔の背の高い建物の破片が落ちてくるのが見えた。

八手もナナも帰還者だから昔の背の高い建物の破片に当たっても平気だけれども、高尾もクリスも帰還者じゃないから昔の背の高い建物破片に当たったら駄目だと思う。

だから足が硬くて動きにくかったけど、八手は頑張って走る事にした。

ナナも後ろからついてくる。

走っていると、後ろで昔の背の高い建物の破片がとなりの昔の背の高い建物に当たって崩れていた。

昔の背の高い建物の場所から出て後ろを見ると、昔の背の高い建物の破片が別の背昔の背の高い建物に当たって、その破片がほかの昔の背の高い建物に当たって、昔の背の高い建物は全部崩れてしまった。

昔の背の高い建物の破片は機械の人間が片付けてくれるからお気に入りの場所にはまたいけるけど、もう昔の背の高い建物は湖の底にしかないから、昔の背の高い建物の上から空の月の近い位置から月を見ることはできないと思う。

あの月が見れないと思うと八子はちょっとだけ寂しかった。

## 高尾の日記・その四

今日は本当に八手に助けられた。

八手がいなかったらあの高層建築物の屋上から落下して僕もクリスも死んでいただろう。

だから僕は八手に「助かったよ」と礼を言ったんだけど、八手からの反応は無かった。多分意味は知っているとと思うんだけど、それよりも集中している事があったのだろうか？

月の方を見てたし、多分、あの高層建築物が壊れてしまったことかな？

あそこに立ち入るのは危険だから保護者に止められてたけど、周りに何も無い高い所から見る月は綺麗だったし、他の人間はともかく僕とクリスとケイはよく立ち入って月見をするお気に入りの場所だった。

きつと、八手にもお気に入り場所だったんだろう。

もう古代の高層建築物はこの辺にはないし、僕達の家は全部平屋だから、屋根にのぼっても周りの森に邪魔されてよく見えない。

そう考えるとあの月はもう見れないということになる。ちょっと残念だな。

今度少し遠出して、新たなスポットを探すべきか？

とにかく、僕は八手に助けられた。

そして同時にリターナの運動能力というものをまざまざと見せつけられた。

リターナが頑丈なのは知っていたけれども、まさか高度三十メートルから落下して傷一つ負わず、しかもその後、あんな速度で走れるとは思わなかった。

八手は高層建築物から落下した後で、まだ固まっている足で走り出した。

その速度は測っていないから正確にはわからないけれども、百メートルを五秒台で走っていたと思う。

これは明らかに人間が出せる速度ではない。大昔の記録を見ても、生身の人間は百メートルを八秒台で走るのがせいぜいで、しかもそれは百メートルに限った事だ。一キロメートルにも及びあんな速度で走れたなんて記録はどこにもない。

これが保護者達が恐れている事なのだろうか？

リターナの運動能力は人間の比ではない。

確かに街中に廃棄されている全てのリターナがこれだけの能力を持っているのだとしたら保護者は管理どころではないだろうが、しかしそれだけなのだろうか？

いや、例え全てのリターナが同じ運動能力を持っていたとしても、問題にはならないだろう。



別にリターナが保護者には向かう事など無いだろうし、だいたい純粋な人間ならともかく、僕等にはそんな感情は無いのだから。

とにかく、今はまだ結論を出す段階ではない。観察を続けるとしよう。

もう一つ、今日の事で気になった事は、八チが僕を背負ってあの危機から脱出したように、ナナもクリスを背負って八チと同じように行動したということだ。

これは単に八チの真似をしただけという可能性もあるが、そうではないだろう。

なぜならこの十日の間にナナが八チの真似をした事など無いからだ。それどころかナナはこっちが誘導しない限り動こうともしない。

それがなぜ、あの場面においてのみ行動したのか……駄目だ、現在の情報だけでは推測すらできない。

そもそも、リターナについては謎が多すぎる。姿形は同じでも、同じ人間種であるかすら怪しいのだから。

八チと僕との遺伝子の差を調べてみたら、それは数値の上ではわずかな差ではあるが、種族的には人間とゴリラほどの差があった。

これは、純粋な人間の遺伝子が情報規制されている現在ではどちらが純粋な人間に近いかわからないが、いずれにせよ僕達人間とリターナとの間には種族レベルの差があるということだ。

とにかく、リターナについては分からない事がまだまだ多い。  
引き続き観察を行う事にしよう。

いけないこと

ハチはナナが可愛いと思うのだ。

短いキレイな黒い髪も、少し膨れた丸いほっぺも、少し低めの鼻も、つんと突き出た唇も。ハチの姿を映す、黒い虚ろな瞳も。

ハチはナナの全てがとっても可愛いと思うのだ。

だから、ハチはナナを見ているのが好きなのだ。

ナナを見ていると心が温かくなるし、ナナを見ていると落ち着いた気分になれるし、ナナを見ていると幸せな気がするのだ。

けど、最近は少し変なのだ。

相変わらずハチはナナが可愛いと思うし、短いキレイな黒い髪も、少し膨れた丸いほっぺも、少し低めの鼻も、つんと突き出た唇も、黒い虚ろな瞳も、その全部が大好きだ。

けど、ナナを見ていると心が苦しくなるし、ナナを見ていると落ち着かない気分になるし、ナナを見ているとナナの小さな唇にハチの大きな唇を合わせてみたくなる。

ハチはナナの小さな唇にハチの大きな唇を合わせてみたい。

けれども、それはとてもいけないことのような気がする。

だからハチはナナの小さな唇にハチの大きな唇を合わせないし、

いつのまにか合わせそうになっていてもぎりぎりで我慢する。

けれども、そうするとよけいにナナの小さな唇に八チの大きな唇を合わせたくなくて、最近ではナナの小さな唇に八チの大きな唇を合わせることはかり考えてしまうのだ。

ナナの小さな唇に八チの大きな唇を合わせるのはいけない事だ。

それがなんでいけないことなのか分からないけれども、とにかくいけないことなのだ。

なんでそれがいけないことなのか分からないけれども、いけないことはいけないことなのだ。

だから八チは我慢する。

けど、我慢するともっとナナの小さな唇に八チの大きな唇を合わせなくなるのだ。

八チはよく分からなかった。

何が分からないのか、それもよく分からなかった。

## 高尾の日記・その五

今日は八チがナナと口を合わせようとしていた。

それが何の意味がある行為なのか僕には分からないけれども、ひよっとしたらリターナ特有の習性なのかもしれない。

観察するべきなのだろうか？

それはともかく、最近の八チは様子が変わだ。

なんだか落ち着きが無いし、いらいらしているみたいだし、見様によつては落ち込んでいるようにも見える。

まるでクリスを見ているようだ。

こんな事は今までに無かった事だ。

これはやはりナナに原因があるのだろうけれども、ナナの何が原因となっているのかだろうか……まるで見当がつかない。

少なくとも僕自身の経験からは該当する事象を体験した事は無いし、一般的な人間の男が女が近くにいたせいでこんな変化を見せた件例は聞いた事が無い。

ひよっとしたら純粋な人間方面に関係があることなのか？

とすると、あの口を合わせようとする行為も昔の資料を調べれば何なのかわかるかもしれない。後で調べておく事にしよう。

それにしても、僕の研究もようやく軌道に乗ってきたような気がする。

八子を僕達人間と同じように見てしまっているせいで理解できないでいる事が多いが、八子は順調に変化を見せ始めているし、リターナに関するデータも増えてきた。

引き続き、研究を続ける事にしよう。

## 湖の底

八手はよく分からなかった。

何が分からないのか、それもよく分からなかった。

よく分からないのは落ち着かなくて、気持ち悪くて、いらいらする。

だから八手は落ち着きたくて、気持ち良くなりたくて、清々しい気分になりたくて、八手のお気に入りの場所に一人で来た。

湖を見ていると波間がキレイで落ち着いた。

一歩先がずっと下なのが面白くって、気持ちよかった。

湖の底に昔の背の高い建物があるのが不思議で、清々しい気分になった。

けれども、落ち着いてて、気持ち良くて、清々しい気分なのに、気がつくとも八手はナナの小さな唇のことを考えてしまうのだ。

そうすると落ち着かなくて、気持ち悪くて、いらいらしてくる。

八手はよく分からなかった。

なにがしたいのか、自分でも分からないのだ。

八手はナナの小さな唇に八手の大きな唇をあわせたい。

けど、それはいけないことだ。

いけないことは、してはいけないことなのだ。

けど、いけないことならば、なんでしたくなるのだろうか？

八手はよく分からなかった。

本当によく分からなかった。

だから八手はじっと湖の底を見ていた。

そうすれば、落ち着いて、気持ち良くて、清々しい気分になれるから。

分からないことを考えて、落ち着かなくて、気持ち悪くて、いらしないから。

だから八手は一人でじっと湖の底を見ていたのだ。

そうしたら、後ろの方で音がした。

後ろを向くと、そこにはケイがいた。

ケイの名前は浅羽・袴田・慶太郎。

製造番号はNH 60000。

成人した年は不明。



それ以外はよく分からない。

ケイは八手の横に立って湖の底を見はじめた。

だから八手も湖の底を見ることにした。

「何でこの湖の底に建物が建っているんだと思う？」

ケイは八手にそう言った。

八手は分からなかったから、だから首を横に振った。

そうすると、ケイはこう言った。

「湖の底に建物が建っているのはね、それは、昔はそこに人が住んでいたからなんだよ」

八手はケイが言っていることが良く分からなかった。

人間は水の中では息ができない。だから湖の底に住めるはずが無いのだ。

八手はそう思った。

だから、八手はケイにそう言った。

そうすると、ケイはこう言った。

「昔はこの湖の底と僕達が建っている場所は同じ高さだったんだ。

けど、戦争があつてね、地面が歪むほどの爆弾が使われたんだ。その爆弾はこの辺りにも落ちて、地面が陥没した。その陥没した地面に水が溜まってこの湖はできたんだ」

八手は分かったけど、やっぱり分からなかった。

どうしてそんなことをしたんだろう？

そんなことをしたら建物が湖に沈んでしまつて住めなくなるのに。

「どうしてそんな事が起きたか分かる？」

ケイは八手にそう言った。

八手は分からなかった。

いくら考えても分からなかった。

だから八手は首を横に振った。

そうすると、ケイはこう言った。

「それはね、仲良く出来なかったからなんだよ。

仲良く出来なくて、仲良くなれるなんて思わなかったから。

だから互いに互いを理解できなくて、理解しようとしなくて、自分の事ばかり考えて、邪魔だから互いに互いを排除しようと思ったんだ」

八手はよく分からなかった。

なんで理解できなかったんだろう？

人間は八チよりいろいろ感じる事ができるし、いろいろ考える事ができる。

それなのに、なんで仲良くなれると思わなくて、理解しようとしてなくて、邪魔に思って排除しようと思うのだろうか？

八チは分からなかった。

だから八チはケイに聞いた。

そうすると、ケイはこう言った。

「それはね。互いに互いを見てなかったからだよ。互いに目を合わせようとしなくて、自分の考えしか信じなくて。他の人なんてどうでも良いと思ってたんだ」

それを聞いても八チはよく分からなかった。

なんで他の人はどうでもいいんだろう？

八チはナナと一緒に好きだ。

八チは高尾と一緒に好きだ。

八チはクリスと一緒に好きだし、八チはケイと一緒に好きだ。

八チはよく分からなかった。

だから八手はケイに聞いた。

そうすると、ケイはこう言った。

「そうだね。」

じゃあ、もし自分がその人の目を見たくても、相手がこっちの目を見ようとしなかったら？」

八手はよく分かった。

八手はナナに八手を見て欲しい。

けれどもナナの目は虚ろで、八手の姿がナナの瞳に映っていても、ナナは八手を見ていないと思う。

八手はよく分からなかった。

どうしたら相手に見てもらえるのかが分からなかった。

だから八手はケイに聞いた。

そうすると、ケイはこう言った。

「それは……とにかく行動するしかないね。」

とにかく行動して、自分が相手を見ている事を、自分が相手に自分を見てもらいたいと思っっている事を相手に分かってもらおうしかないよ。」

八手はよく分かった。

だから八手は走り出した。

八手はナナが好きだ。

ナナが八手を好きかは分からない。

八手はナナを見ている。

ナナは八手を見ていない。

だから八手は走り出したのだ。

ナナに八手を見てもらいたいから。

ナナに八手を好きになってもらいたいから。

## 瞳の中に見えるもの

八手はナナを見ている。

ナナは八手を見ていない。

八手はナナに八手を見てもらいたい。

だから、行動しなくてはならないのだ。

八手はナナが好きだ。

ナナが八手を好きかは分からない。

八手はナナに八手を好きになって欲しい。

だから、行動しなくてはならないのだ。

八手はナナの前に立った。

八手はナナの目を見た。

ナナの目には八手が映っている。

けれどもナナは八手を見ていない。

八手はナナが好きだ。

短いキレイな黒い髪も、少し膨れた丸いほっぺも、少し低めの鼻

も、つんと突き出た唇も、黒い虚ろな瞳も、その全部が大好きだ。

八手はナナに八手を好きになって欲しい。

八手の髪も八手のほっぺも、八手の鼻も、八手の唇も、八手の瞳も。

八手はナナを見ている。

八手はナナに八手を見て欲しい。

だから八手は行動した。

だから八手はナナの肩を掴んだ。

だから八手はナナの顔に八手の顔を近づけた。

だから八手はナナの小さな唇に八手の大きな唇を合わせたのだ。

ナナの小さな唇に八手の大きな唇を合わせるのは、とても気持ちがいいことだった。

ナナの心が八手に伝わるようで、八手の心がナナに伝わるようで、とても不思議で、とても気持ち良くて、とても心地良くて、八手はずっとナナの小さな唇に八手の大きな唇を合わせていたかった。

けれども、唇を合わせていたら口から息ができなくて、息が苦しくなってきたから、だから八手は仕方なくナナの小さな唇から八手の大きな唇を離れた。

八子はナナの肩を掴んでいる。

ナナも八子の肩を掴んでいた。

八子は大きく息をした。

ナナも大きく息をする。

八子はナナを見ている。

ナナも八子を見ていた。

「八……子？」

ナナは首をかしげて八子にそう言った。

八子はなんだかとても嬉しかった。

名前を呼ばれただけなのになんだかとても嬉しかった。

「ナナ」

だから八子も名前を呼んだ。

名前を呼ばれて嬉しかったから、だから八子もナナの名前を呼んだのだ。

ナナのほっぺが緩んだ。

八子のほっぺも緩んだ。



ナナの瞳に八子の姿が映っている。

八子の瞳にもナナの姿が映っていると思う。

八子はナナを見ている。

ナナも八子を見ている。

ナナの瞳はもう虚ろじゃなかった。

## 高尾の日記・その六

今日、ハチがナナにキスをしていた。

キスという行為は……いや、おぞましくてここに書きたくも無い。とにかく、ハチはナナにキスをした。

その結果、ナナは片言だが言葉を喋るようになった。

これが何を意味するのか、今はそんな事、考えたくすらない。

そしてもう一つ分かった事がある。

それは保護者がリターナを恐れていたのは僕が考えていたような理由じゃなかったと言う事だ。

……正直な話。僕は怖い。

僕はただ、保護者が恐れている事が何かを知りたかっただけなのに、まさかこんな事になるなんて。

けど、もう取り返しはつかない。

この先どうなるかなんて分からないし、考えたくも無い。知りたくも無い。

そつだ、止めてしまおう。

リターナの研究を止めてハチやナナと別々に住むようにすればこれ以上、間近であんな行為を見なくて済む。

止めてしまおう。

……けど、これは僕の責任だ。

だからせめて見届けなくてはならないと思う。

関わっていかねければならないと思う。

けど、今は何も考えられないから、だから観察でわかった結果だけ書こうと思う。

それぐらいは許されると思う。

僕自身、信じられないし信じたくないしどうしてそんな事になっているのか全然考えがまとまっていない。

だから本当はこんな事は書きたくないし考えたくないし本当に嫌なのだ。

……けど、逃げる事はできない。

こんな事を肯定するのは怖いけど、目をそむける事だけはできない。

だから、ここに結論だけ記す。

そう……リターナの方が僕達よりも純粹な人間に……近いのだ。

## 第二部 クリスとナナ

「どうやら、賭けは私の勝ちのようだな」

「まだ、決まったわけじゃない」

「確かにまだ確定したわけではない。が、それも時間の問題というものだ。

しかし、君も甘い男だ。

自分が負けると分かりつつも彼を悩みから解放するとは。

私的には、あれは裏切りととられても仕方が無い行為だと思うが？」

「それは……そうかもしれない。

けれども、僕は彼に関わってしまった。

関わってしまった以上、僕には見放すような真似なんてできない」

「まあ、君らしいといえば君らしい。

君のその甘いところは君の短所だが、長所でもある。

それに、それは私には無い特徴だ。

だからこそ、君の意見には耳を傾ける価値があると私は考えているのだがね。

……さて、それでは出かけるでしょう」

「出かける？」

「そうだ。どうやらナノロイドが動き出しそうなのだ。

今までならそれも有りだったが、今回はケースが違う。

彼はもう完成しているのだから、ナノロイドの横暴を許すわけには

行かない。

それに、ここまで働いてくれた君のお気に入りのもう一人の彼に、  
少しご褒美をあげようと思ってね……」

## クリスの傷心

クリスは怒っていた。

なぜなら、あの大昔の高層建築物から落つこちた日以来ずっと待っていたというのに、いつまで経ってもサンタがお見舞いに来なかったからだ。

確かに怪我はたいした事は無かったし、サンタだって被害者だったけれども、でも、か弱いレディがあんな事故に巻き込まれて心に傷を負ったのだから、クリスとしては一度くらいはお見舞いに来てくれても良いと思うのだ。

クリスは怒っていた。

だからあの日の心の傷が癒えて、外に出ても大丈夫になったら、クリスはすぐに高尾・フレサンジ・三太の家に殴りこんだのだ。

「サンタ！」

サンタの家の扉は開いていた。

だからサンタは家のすぐ中にいるのだろうと思って、クリスはサンタの家に怒鳴り込んだのだ。

けど、サンタの家にサンタはいなかった。

サンタの姿も、サンタが飼っているハチとかいう男の子型のリタナナの姿も無く、サンタの家には最近ハチが拾ってきたというナナ

という名前の女の子型のリターナがいただけだった。

クリスはがっくりした。

せつかくクリスが来たというのに、サンタはいつたいどこに出かけているのだろうか。

「サンタのバカァー！」

クリスは大声でサンタの悪口を言った。

そうやってサンタからは反応が無いし、側にいたナナとかいう女の子型のリターナがびっくりしたくらいだ。

クリスはなんだか悲しくなって、その場にしゃがみこんで顔を伏せた。

そうなのだ。

どうせサンタはクリスの事なんてなんとも思っていないのだ。

だからサンタはクリスがサンタに構って欲しがっても構ってくれないし、怪我をしてもお見舞いにも来てくれないし、会いに来たというのに家にいさえもしないのだ。

クリスは悲しくなってきた。悲しくって、なんだか泣きそうだったけれども、でも泣いたりしたら何かに負けるような気がしたから、泣く直前で必死に頑張って堪えていた。

クリスが塞ぎ込んで泣くのを我慢していたら、不意に誰かの手が

クリスの頭に触れた。

「サンタ！」

クリスはそれがサンタの手だと思った。

サンタが帰ってきてきてクリスが泣きそうになっているのが見えたから、だからそっと優しく手を頭に乘せて撫でてくれたのだと思ったのだ。

クリスは嬉しくなって飛び上がってその手の主を見た。

そしたらそこにいたのはサンタじゃなくて、驚いた顔をした女の子型のリターナだった。

「なんだ……」

クリスはがっかりした。がっかりしすぎてまた悲しくなってきた。

サンタはどこに行ってしまったのだろう。クリスがこんなに悲しんでいるというのに、なんでここに来て慰めてくれないんだろう。

「ふえええん」

ちょうどいいところに女の子型のリターナが立っていたから、クリスはそのリターナの胸の中に飛び込んだ。

胸の中に飛び込んで、手を背中に回して抱きついて、胸に顔をうずめたら、なんだか心地良くなって柔らかくて温かくって、心の防壁が緩んでしまっとうとう泣き出してしまった。



そしたら、女の子型のリターナもクリスを抱きしめてくれて、そっと頭に手を置いて優しく撫でてくれた。

その女の子型のリターナの胸の中は心地よくなって、頭を撫でる手が気持ち良くなって、不思議なものに包まれているような気がして、クリスはなんだか癒されていくような気がした。

クリスは不思議と安心できて、泣き止んだ。女の子型のリターナに抱かれていたら、嫌な気分が抜けてきて、だんだんと元気が出てきた。

元気になったら今度はまたサンタの事が気になった。

ここに来てから結構時間がたっているというのにまだ帰ってきていない。本当にサンタはどこに行ってしまったのだろうか？

クリスはだんだん腹が立ってきた。

こんなに悲しい気分になったのも、思わず泣いてしまったのも、全てはクリスを放っておいてどこかに出かけてしまっているサンタが悪いのに、なんでサンタは今すぐ帰ってきてきてクリスを慰めてくれないんだろうか。

「サンタのバカァー！」

だからクリスは大声でサンタの悪口を言った。

「あ、ごめん」

そしたら女の子型のリターナ（確かナナとかいう名前だったけ？）がびっくりしてしまったので、クリスは素直に謝った。

それにしてもどうしてくれよう。こんなに放っておかれるなんて耐えられそうにも無い。心が傷ついた。もう立ち直れないかもしれない……

「そつだ、旅に出よう！」

我ながらナイスなアイデアに思わずポンと手を叩く。

傷心のレディは旅に出るものなのだ。心の傷を癒す旅に出て、色んなものに触れ合って、嫌な事など全部忘れてしまおうのだ。確かこの前見た大昔の映像ではそつだったはずだ。

「そつしよう。ねえ、ナナ」

旅といえば道連れだ。傷心旅行に出るお嬢様とそれに付き従う侍女。うん。なかなか良いシチュエーションかもしれない。

「そつと決まったら用意しなくっちゃ」

こうしてクリスは傷心旅行に出る事にした。

クリスは旅に出る仕度をするために、問答無用でナナの手を引いて、ナナを自宅に引き連れていく。

クリスによって引きずられて行くナナは、見様によっては小首を傾げているようにも見えた。

クリスの傷心（後書き）

8 / 13 : 誤字修正

げんぷうけい？

結局のところ、ナナはそのままクリスに拉致されてクリスの傷心旅行に付き合わされてしまっていた。

ほとんど森に侵食されてしまっている、ろくな舗装もされていない山道が続く森の中。ナナは今、屋根がオープンなエアカーの助手席に乗っている。

どんな奇跡の産物なのか、まともに動く千年物のエアカーをどこからか見つけてきたクリスは、ナナの横で運転技術をマスターしようとう奮戦している。

けれども、そんなクリスには構わずに、ナナは流れていく景色をじっと眺めていた……

右目の方から左目の方にたくさんの木が流れていく。

楽しい気持ち？ そう、これは楽しい。

木が流れていくのは楽しい。たくさんの木が流れていくのは楽しい。

だからナナはじつと景色が流れていくのを眺めていた。楽しいからじつと眺めていた。

強い風がナナの身体に当たり、ナナの身体を抜けていく。

良い気持ち？ そう、これは良い気持ち。

風に当たるのは良い気持ち。風が身体を抜けていくから良い気持ち。

良い気持ちだから、ナナはバンザイをして手を上に突き出してみた。

すると、開いた手の中には何かを掴んでいるような感触があった。

ナナはそれを掴んで目の前に持ってきた。手を開いてみる。けど、そこには何も無い。

不思議な気持ち？ そう、これは不思議。

あるはずなのに無いから不思議。見えないのにあるのは不思議。

いろんな感情が感じられる。いろんな感情が溢れてくる。

知識はハチからもらったから分かる。けど、感じるのははじめてだから面白い。

面白い気持ち？ そう、これは面白い。

分かるのは面白い。感じるのは面白い。はじめでは不思議だから面白い。

だからナナはいろんな事を感じたいと思った。

## クリスの誤算

クリスは困っていた。

せっかく旅に出たというのに乗ってきたエアカーが故障してしまっただの。

前途多難とはこの事だ。いったいこの先、どうやって移動しろと言っただろう。

「サンタのバカァー！」

クリスは大声でサンタの悪口を言った。もちろん八つ当たりだ。

けど、そんなに八つ当たりでもないのかもしれない。クリスがこんな目にあっているのは全てサンタが悪いのだから。うん、そういう事にしておこう。

さて、サンタの悪口を行ったら元気が出てきた。この先いったいどうしようか？

前の道を見る。何も無い。

クリスの旅の目的地はお隣の第二十三番管理区だ。人生経験豊富な大人の女性に会って、どうしたらサンタに構ってもらえるかを聞こうと思うのだ。

けど、そこに行くには山を一つ越えなくてはならない。

後ろを見る。遠くの方に自分の管理区が見える。今から歩いて帰れば日が沈む前には帰れるかもしれない。

クリスはなんだかくじけそうになった。

自分の家が恋しくなってきた。

旅の目的地に着くためには、ここから家までの倍の距離は歩かなくちゃいけない。

野宿もしなくちゃならない。

もし着いたとしてもそこから家に帰るにはさらに同じ分の距離だけ歩かなくちゃいけないのだ。

旅なんて止めて家に帰れば今日は自分の家でぐっすり眠れる。

つらい目に会わなくて済む。

明日にはサンタに会えるかもしれない……

「だめえー！」

クリスは大声で叫んだ。

くじけそうになる心を自分の中から追い払った。

ここで諦めたら何かに負けるような気がする。負けるのは嫌だ。

つらいのは嫌いだけれど、負けるのはもっと嫌いだ。

負けてなんかやらないんだから！ つらくなんて無いんだから！  
そう。つらくなんて無いのだ。むしろ、これこそが待ち望んでいた事なのだ。

これはきつと試練なのだ。

クリスが大人のレディになるための壁なのだ。

「大昔の映像だとそうだったもん！」

クリスは誰に言うともなく大声で叫んだ。

そう。きつとこれはクリスが生まれ変わるための試練なのだ。

きつとこの試練を乗り越えられたら、サンタの方から構って欲しが  
るくらいの素敵なレディになれるのだ。

「負けないもん！」

クリスは気合を入れた。

けど、その意気込みはすぐに水を指される事になった。

「ん、どうしたの？」

不意に服の裾を引っ張られたから何かと思ったら、ナナがクリスの服を握っていた。



ナナはぼかんと口を開けて空を見上げている。

なんだろうと思ひ、ナナに釣られるようにクリスも空を見る。

空を見たら、あれほど天気の良い空が、今では焦げたパンみたいに黒々とした雲で覆われている。

クリスは血の気が引いていくような気がした。

その頬に一滴の水滴が当たる。

最初はほんの一滴。

けど、その一滴が二滴に。二滴が三滴になり、水滴は見る間に数が増えて一瞬でクリスとナナの全身を水浸しにする。

「……………最悪」

クリスはうんざりと呟いた。

クリスの意気込みに文字通り水を差したものの。

それは雨だった。

クリスの誤算（後書き）

8 / 13 : 誤字修正

あめのうた？

突然降り出した雨にクリスは木の下に避難したが、ナナは動かなかった。

雨に濡れるのにも構わずに、ナナは雨空の下に身を投げ出して、じっと雨を感じる。

初めて感じる雨。空から水が降ってくるという不思議な現象に、ナナは様々な感情を誘発されていた……

雨？ そう、これは雨。

空に溜まった水が落ちてくる現象。大きくてキレイで不思議な現象。

冷たい気持ち？ そう、これは冷たい。

水滴が当たるのは冷たい。肌に水滴が当たるのは気持ち良くて冷たい。

寒い気持ち？ そう、これは寒い。

肌に水滴が当たるのは寒い。気持ち良いけど冷たくて少し寒い。

くすぐったい気持ち？ そう、これはくすぐったい。

水滴が当たるのは気持ち良くてくすぐりたい。肌に水が伝っていいのはくすぐりたい。

痛い気持ち？ そう、これは痛い。

肌を水滴が叩くのは痛い。くすぐりたいけれども少し痛い。

悪い気持ち？ そう、これは悪い気持ち。

服が肌に張り付くのは気持ち悪い。面白いけれども気持ち悪い。

キレイな音？ そう、これはキレイな音。

水滴が地面を叩くのはキレイな音。いっぱい水滴が地面を叩くのはキレイな音。

水滴が葉っぱを叩くのはキレイな音。いっぱい水滴が地面を叩くのはキレイな音。

葉っぱの水滴が地面を叩くのはキレイな音。風が葉っぱを揺らすのはキレイな音。

キレイな音を聞くのは気持ちが良い。水滴を浴びるのは冷たくて寒いけど気持ちが良い。肌に水滴が当たるのはくすぐりたいけど気持ちが良い。服が身体に張りつくのは気持ちが悪いかとも面白くて気持ちが良い。

楽しい気持ち。そう、これは楽しい気持ち。

冷たくって、寒くって、くすぐたくって、痛くって、気持ち悪

いけど気持ち良くなって、面白いから楽しい。

雨の中に身体を預けるのは楽しい。

ナナは楽しくってなんだかいてもたってもいらなかった。

身体の中に何か温かいものが溢れてくる気がして、なんだか身体がうずうずしてきて、じっとしていられない気分になったから、だから自然と身体が動き出した。

ナナは雨の中で踊り始めた。身体のおもむくまま、感情のおもむくまま、雨が降りしきる山道の真ん中で、想うがままに踊り始めた。

楽しい気持ち。踊るのは楽しい。

雨の中で踊るのは楽しい。感情のままに身体を動かすのは楽しい。

雨と身体が一体になる。音と身体が一体になる。大地と身体が一体になる。空気と身体が一体になる。

自然と一体になる陶醉感に酔いしれる。

ナナはいつまでも雨の中で踊り続けた。

あめのうた？（後書き）

8 / 13 : 誤字修正

## クリスの憂鬱

クリスは落ち込んでいた。

せっかく決意を新たにしたというのに、その直後にこの雨だ。落ち込まない方が嘘だと思うのだ。

クリスはため息を吐いた。それにしても、あの子は何なのだろう。

クリスはこの世にも落ち込んでいるというのに、ナナはこの雨の中、何であんなにも楽しそうなのだろう？

ナナが雨の中で踊っているのを見ていたら、クリスはますます落ち込んできた。

なんだかこの世の中の全てのものから見放されているような気がしてきた。

ナナはあんなに楽しそうなのに、クリスはちっとも楽しくない。

なんだか不公平な気がして気が滅入る。

どうしてクリスには嫌な事ばかりが起きるのだろうか？

何でナナはあんなにも楽しめるのだろうか？

クリスはため息を吐いた。そんな事、考えたって分かるわけが無い。

いくら考えてもクリスはこの状況を楽しめないし、ナナはこの状況を楽しむだけだろう。

雨に濡れて身体が寒くなってきた。

クリスはお尻が濡れるのも構わずに地面に腰を下ろして両膝を手で抱いた。

寒いし、つらいし、地面は固いし、なんだか家がまた恋しくなってきた。

温かいシャワーとふかふかのベットが恋しい。

クリスは空を見た。

なんだか沼の底みたいな黒雲は、全然まだまだ晴れそうにも無い。

家に帰ってしまおうか？

家に帰るだけなら、この雨の中を歩いていってもそんなにつらそうじゃない。

いや、それは出来ない。

そんな事したらクリスは負ける事になるのだ。

別に誰が勝ちとか負けとかを決めるわけじゃないけれども、クリス自身が負けだと思っただらそれは負けなのだ。

クリスは負けたくない。



……けず、じのままだとくじけてしまっただった。

くるしいじめる？

雨の中で踊り続けていたナナは、急に息苦しさを覚えて踊る事をやめた。

ナナの瞳にクリスの姿が映る。両膝を抱え、小さく丸まっているクリス。

それを見て、ナナの心に新たな感情が湧き出した……

苦しい気持ち？ そう、あれは苦しい。

クリスは苦しい。クリスは寒いから、だから苦しい。

悲しい気持ち？ そう、あれは悲しい。

クリスは悲しい。クリスは一人だから、だから悲しい。

つらい気持ち？ そう、あれはつらい。

クリスはつらい。クリスは不安だから、だからつらい。

クリスを見てみると、ナナは苦しい。クリスが苦しいから、ナナも苦しい。

クリスを見てみると、ナナは悲しい。クリスが悲しいから、ナナも悲しい。

クリスを見ていると、ナナはつらい。クリスがつらいから、ナナもつらい。

苦しいのは嫌だ。悲しいのは嫌だ。つらいのは嫌だ。

苦しいのは心が重くなるから嫌だ。悲しいのは胸が潰されるようだから嫌だ。つらいのは自分が消えてしまいそうだから嫌だ。

ナナはクリスに楽しい気持ちになって欲しかった。

クリスが楽しくないと、ナナも楽しくない気持ちになるから、だからナナはクリスに楽しい気持ちになって欲しいのだ。

クリスは寒くて一人で不安だから楽しくない。

だからクリスが楽しい気持ちになるには、温かくて、ナナが側にいて、安心できる場所があればいいのだ。

だからナナはクリスの手を取って走り出した。

温かくて、安心できる場所を目指して。

その場所は空の知識が教えてくれる。

## クリスの混乱

クリスは戸惑っていた。

ナナが、いきなりクリスの手を取って走り出したのだ。

クリスは訳がわからなかった。

そもそもリターナがこんな行動を取るなんて思わなかった。

クリスが知ってるリターナは、数ヶ月前までの知識ではそこらへの地面に転がっている自分じゃ動かない奴だったし、ここ数ヶ月の間に八手を見ていて自分で動く奴もいるんだと知ったけれども、けどこんな風に自分から率先して人間を引っ張っていくリターナがいるなんて思わなかったのだ。

クリスは驚いて戸惑っていた。これでは人間と変わらないではないか。

だからクリスは呆気に取られて、ナナにされるがままにナナの後について走っていた。

けれども、驚きが過ぎ去った後で、ようやくクリスは自分で考えられるようになった。

そうしたら、クリスの頭の中に一つの疑問が湧きあがってきた。ナナはどこに向かっていているのだろうか？

「ねえ、ナナ。どこに行くの？」

クリスはナナに話しかけた。けれども、ナナから返事は無かった。  
「ナナってば！」

クリスは今度はちょっときつい口調でナナに話しかけた。けど、それでもナナから返事は無かった。

クリスは頭に来た。

クリスが聞いているのに何も言わないなんてどういっつもりだろう。

……いや、そういえばハチは喋れるけれど、ナナが喋っていると  
ころをクリスは一度も見てない。

ひょっとしたら喋れないのだろうか？

けど、それでも許せない。

話しかけても無視するなんて酷いと思うのだ。

それに冗談じゃない！

喋れないって事は、何にも考えてないのかもしれない。

何にも考えてないなら、ナナはクリスをどこに連れて行こうというのか。

このままナナに任せていたら、この森の中で迷子になって、遭難

してしまうかもしれないじゃないか。

白骨死体になった自分の姿を想像する。

森の中で迷子になって遭難したら、家に戻れなくて見つけてもらえなくて、餓死してそうなってしまふのだ。大昔の映像ではそうだった。

冗談じゃない。そんな事になるなんて許せない！

「そんなのイヤ！」

クリスは大声で叫んだ。

クリスは大声で叫んで慌ててナナの手を振り解いた。

手を振り解いて止まったら、なんだか急に息が苦しくなってきた。

ナナはクリスのペースも考えずに走っていたから、走っている間は気がつかなかったけれども結構苦しかったのだ。

肩で大きく呼吸をしながらナナを見てみたら、ナナは不思議そうな顔をしていた。

不思議そうな顔をしながら、ナナは再びクリスの手を取って走り出そうとする。

クリスはその前に手を振り解いた。ナナの手を振り解いてナナを睨みつける。

そうしたら、ナナは不思議そうな顔の中に理解の色を見せた。

それを見て、クリスはほっとした。ようやく話を聞いてくれる気になったのだろう。

クリスは気を抜いて肩の力を抜いた。

そうしたら、その次の瞬間、クリスは宙に浮いていた。

「え？」

我ながら間の抜けた声が口から漏れる。けど、それは仕方が無いと思う。

クリスは文字通りナナに担ぎ上げられていた。

バンザイをしたような格好のナナに背中を持たれて、自分の身長より高く持ち上げられていた。

「え、ええー！」

クリスは絶叫した。

状況が良く分からなかった。

あまりにも予想外すぎて、規格品の頭はこの規格外の出来事についていけなかった。

クリスが混乱している間にも、ナナは走り出していた。

クリスの手を引いて走っていた時とは比べものにならないスピードで森の中を疾走して行く。

森の緑が真横に伸びていく。

背の低い木から生えた木の枝が目の前を過ぎていく。

クリスは怖くって目をつぶって丸くなった。

目をつぶったら何が起きるか分からないけれども、目をつぶれば何も見えないから怖くない。

クリスは目をつぶってじっと怖いのを我慢していた。

そして気がついた時には地面に転がっていた。

もう怖い事は起きていない事を確認して、恐る恐る目を開ける。

「なに……これ？」

そこに飛び込んできた光景に、クリスは思わず呟いた。

そこには古い洋館が建っていたのだ。



クリスの混乱（後書き）

8 / 13 : 誤字修正

つきのひかり？

古い洋館にたどり着いたクリスとナナは、中に入って雨で濡れた服を乾かす事にした。

前文明の設備はよほど物持ちが良かったのか、この古い洋館は照明こそ全滅していたものの、暖炉に炎の映像を投影する必要があるアナログ趣味の暖房装置は生きていた。

服を乾かしているうちに、クリスがうとうとと眠りだす。

眠る必要の無いナナはクリスの頭を膝に抱きながら暖炉に投影された炎を見ていた。

やがて夜になり、それまでじっと暖炉の炎を見ていたナナは、ふと部屋の外でなにか物音がしたような気がしてそれを確かめに行く事にした。

ドアを開けて外に出る。するとそこには小石がぱらぱらと落ちていた。

上を見る。すると、天井に亀裂が走っている。

多分、千年ぶりに人が入ったせいだろう。建物の建築材は劣化していて、すぐに崩れるような事は無いだろうが、この洋館も寿命が近いようだ。

ナナは部屋に戻ろうとする。

しかし、ふと見た通路に見えた、窓から差し込み断続的に続く月明かりの柱にナナは心奪われた……

キレイな光？ そう、これはキレイな光。

窓から差し込む光はキレイ。暗いけど明るいから不思議でキレイ。

ナナはキレイな光に触りたくって、窓から差し込む光の柱に近づいた。

光の柱に手を伸ばしたけれどもそれは触れなくて空を掴んだ。

今度は月明かりに照らされた床に触れてみた。

床には触れられたけれども、やっぱり光には触れられない。

不思議な感じ。これは不思議な感じ。

見えるけど触れないから不思議。見えるけど形が無いから不思議。

ナナは光の柱が窓から伸びている事に気がついた。

光の柱をたどるように窓に近づいて外を見ると、空には月が見えた。

月？ そう、あれは月。

月は地球の衛星。太陽の光を浴びて輝く衛星。

月の光？ そう、これは月の光。

月の光は明るくてキレイ。月の光は優しくキレイ。

月の光が森を照らすのはキレイ。月の光が草や花を照らすのはキレイ。

月の光は明るいけど暗いから不思議。月の光は明るいけどまぶしくないから不思議。

ナナは月明かりが照らし出す光景に心奪われた。

月の光が綺麗で、月の光を直接浴びたくなって、ナナは窓を空けて外に出た。

外は建物の中に比べて少しだけ寒かった。

けれども埃っぽい建物の中に比べて、外の空気は澄んでいた。

空には雲一つ無かった。

雨が降って塵が地上に落ちた空気は澄んでいた。

ナナは月の向かって手をかざした。

月明かりがナナを照らし出す。

月の光を浴びて身体が光っているように見えるのは不思議だった。

ナナは落ち着いた気分だったけれどもなんだか楽しくて、だからナナは感情のおもむくまま、身体が動くままに踊り始めた。

夜露を浴びた草花がナナの足を濡らした。

月の光がナナの動きにあわせてナナの後ろに大きな影を作った。

夜の冷えた空気がナナの鼻先を掠めていった。

ナナはその全部が楽しくって、夢中で踊り続けた。

月だけが見守る洋館の中庭で、ナナは月明かりが映し出す自分の影をパートナーにしていつまでも踊り続けた。

## クリスの恐怖

クリスは寝ぼけていた。

暖炉に投影された炎だけが照明代わりの薄暗い部屋の中で、クリスはふと目を覚ました。

込み上げてきたあくびをする事を命ずる能信号に抗う事も無く大口であくびをする。

口の中が乾いていたので口を閉じて唾液分を補充する。

身体がむずむずしたので大きく伸びをして、なんとなく周りを見たところで、ようやくクリスは起きた場所がいつもの自分の部屋ではない事に気がついた。

記憶が混乱していた。ここはどこなのだろう？

クリスは急に不安になった。

いつのまにこんなところに運び込まれてしまったのだろうか？

誰がなんでこんなところにクリスを運んできたのだろうか？

そこでクリスは自分が服を着ていないことに気がついた。

羞恥心で顔が赤くなる。

慌てて周りを見回すと、服は近くに脱ぎ散らかしてあった。

クリスはさらに不安になった。

なんでクリスは服を着ていなかったんだらう？

ここにクリスを運び込んだ人は、クリスの服を脱がしてクリスに何をしたのだらう？

クリスは散らかしてあった服を集めてそれを着ながら、必死で寝る前の記憶を思い出そうとした。

服を着終わった後も、服を着た時間の百倍くらいの時間を必死でずっと考えて、そうしてようやくの事でクリスは自分が旅に出たのだと言う事を思い出した。

クリスは安心した。

なんてことは無い。ここにきたのは自分の足だし（誇張有り）、服を脱いだのも自分だ。

「びつくりした」

クリスはなんだか自分の事がおかしくて、笑いながらナナに話しかけた。

けど、話しかけた先にナナはいなかった。そこにいたはずなのに忽然と消えてしまった。

クリスは怖くなった。ナナが消えてしまった。そこにいたはずなのに消えてしまった。

クリスの思考は停止した。あまりの恐怖に何も考えられなくなつた。

けれども思考が元に戻つたら、そこにナナがいたのはクリスが寝る前の事だつたと思い出した。

クリスは安心した。ほつとしたらなんだか自分の事がおかしくてまた笑つてしまった。

笑つた後に部屋を見回した。静かだつた。それに薄暗かつた。

クリスは部屋の中に一人だつた。薄暗い部屋の中に一人なのだ。

自分以外に音をたてる存在がない部屋の中で、リアル指向の炎投影型暖炉がたてる焚き木のぱちぱちという音だけが部屋の中に響いている。

クリスは急に怖くなつた。

薄暗い部屋の中に一人だと思つたら、怖くなつてきたのだ。

部屋の中は暖房が効いているはずなのに、なんだか肌寒くなつてきた。

暖炉の炎が部屋を照らし、その明かりが作る影が怪しく揺れている。

クリスは大昔の映像を思い出していた。古い洋館。薄暗い部屋。独りぼっち……



そうだ、大昔の映像ではこんな時、魔物が出てきてクリスを食べてしまうのだ！

クリスは恐怖に身を縮めた。

周りのものが急に全て怪しく見えてきた。

特に暖炉に照らされて怪しく揺れている影。そうなのだ、あれこそが魔物なのだ！

あの影こそが魔物が化けているものなのだ。

あれから目を離れたが最後、魔物は本当の姿に戻ってクリスを捕まえて食べてしまうのだ！

クリスは必死で影を見つめ続けた。

食べられてしまうのは嫌だ！

一人なのは心細かった。

ナナはいったいどこに行ってしまったのだろうか……

クリスはじっと影を見ていたが、やがて決心をした。

このままじっとしていたらクリスは疲れ果てて、やがて食べられてしまうだろう。

その前にこの部屋から脱出しよう。脱出して、ナナを助け出すの

だ！

二人ならば、交代で見張っていれば影は本当の姿に戻ってクリス達を襲わない。

だからクリスが生き残るにはナナが必要なのだ……それに、一人なのは嫌なのだ！

クリスは部屋から脱出する事にした。

慎重に影から目を離さないようにしてじりじりと部屋の出口に歩み寄る。

やがて出口にたどり着くと、クリスは後ろ手にドアを開け、一目散に部屋の外に出て慌ててドアを閉めた。

魔物は襲ってこなかった。クリスはほっとして肩を撫で下ろす。

そうやって人心地ついたところで周りを見たら、クリスはここが部屋の中にいた時よりも、もっと危険なところなのだという事に気がついた。

ここには影しかなかった。窓から差し込む光が、まるで幽霊みたいな光の影を作っていたし、その他のところは本当に影しかない。

クリスはなんだか魔物の胃袋の中に入ってしまったように感じた。

怖くて足がすくみそうになったけれども、けど、そんなところを見せたら本当に周り中の全ての影が魔物になって襲ってきそうな気がしたから、怖かったけれども必死で頑張って胸を張った。

窓が一つだけ開いていた。

なんだかそこから何かが入ってきてきそうな気がして、クリスは怖いのを我慢して、慌てて窓を閉めた。

クリスは廊下を見通した。

幽霊みたいな光の影が続いているだけで誰もいない。

何かを感じてさっと後ろ側の廊下を見た。

何かを感じたはずなのに、やっぱり何もいない。

きっと魔物はクリスの事を見張っているのだ。

見張っていて、決定的な隙を見つけた瞬間に襲ってくる気なのだ！

クリスは姿を見せない魔物に戦慄しながらも、その慎重さにちょっとだけほっとした。

ようするに気を抜きさえしなければ魔物は襲ってこないのだと言う事を理解したのだ。

そうと分かったら、一刻も早くナナを助け出さなくては。

多分、ナナはこの建物のどこかにいるはずだ。

ひょっとしたら魔物に捕らえられて監禁されているのかもしれない！  
い！

魔物に監禁される自分の姿を思い浮かべる。

考えただけぞっとする。ナナをそんな目にあわせるなんて許さない！

クリスはナナの監禁場所を探し始めた。

屋敷の中の一つ一つの部屋を恐る恐る開けて中を確認していく。

十部屋も確認し終わると、だんだん恐怖は消えていった。

魔物はクリスを襲ってこない。きっと魔物はクリスに恐れをなしているのだ！

そう結論に至ったクリスは、次第に大胆に屋敷の中を練り歩くようになっていった。

逆に魔物を驚かすように、何の恐れも無く思いつきり部屋のドアを開けては、片っ端から部屋の中を確認していく。

クリスは屋敷の中の全ての部屋を見回った。

けれどもナナの姿はどこにも無かった。

クリスは台所に来ていた。床の貯蔵庫の入り口を睨みつける。

探してないのはここだけだ。きっとナナはこの中にいるのだろう。

クリスは地下に続く貯蔵庫のドアを開けた。キーンって音がした。

中は本当に真っ暗だった。

外から入り込む月の光が唯一の光源で、その光が地下貯蔵庫に続く階段に、クリスを介して人の影を作っていた。

クリスはさすがに怖くなった。

でも、こんなに怖いところだからこそ、ここが魔物の本拠地なのだ。

きっと、ナナもここにいるはずなのだ！

クリスは怖かった。

けれども、怖さを必死で押さえて地下に降りる事にした。

怖いのは嫌だ。けど、一人なのはもつと嫌なのだ！

クリスは頑張って地下に続く階段の一步を踏み出した。

暗闇の空間へと身を沈めていく。

地下の空間は本当に真っ暗だった。

貯蔵庫の上からは月の光が入ってきているというのに、そんなものはお構い無しに、絶対に照らし出されたりはしない。

いるはずがないとクリスは思った。

こんな場所に、ナナがいるはずが無い。

こんなところにいれるのは魔物だけだ。

ここにナナがいるとしたら、それは食べられてしまった場合だ。

食べられてしまった……その言葉が脳裏に浮かんだ時、クリスは  
何でその可能性が頭に浮かばなかったのかと自問自答した。

そうなのだ。魔物はナナをさらって監禁なんてしない。

ナナがいなかったら、それは食べられてしまったからなのだ！

クリスは恐怖に怯えた。

そんな可能性にも行き当たらずに、今、クリスは魔物の本拠地に  
足を踏み入ってしまったている。

ここでは魔物はクリスを恐れたりしない。あの暗闇に一歩でも足  
を踏み入れたら最後だ。クリスは魔物に食べられてしまう！

クリスは足がすくんでへたり込みそうになった。

と、その時

カタン

という音が暗闇の中でした。

ほんの小さな音。

けれども、それだけでクリスの理性は吹っ飛んだ。

「……………!!!」

クリスは絶叫した。

なんて言っただけは自分でも分からなかった。

その音は千年ぶりに入り口が開いたために、気圧の変化で棚が軋んただけだったのだが、クリスにそんな事は分からなかった。

クリスは叫びながら一目散にその場から逃げ出した。

台所に出て、廊下に出て、夢中で玄関を開け放って、必死で森の中に駆け込んだ。

森の中に入ると、今度は自分が触った草や風で擦り合う葉っぱのかさかさという音がクリスを怖がらせた。

クリスは新たな恐怖に心が砕けそうになった。

あの音は魔物の笑い声なのだ。

ナナが決定的な隙を見せて、魔物の事を怖がっているのだと知ったから、クリスの事を笑って、クリスの事を食べようとして、追いかけてきているのだ。

クリスは捕食される恐怖に突き動かされて、夜の森の中を全力で疾走した。

木や枝にぶつかりそうになる。草が足にすれて小さなかすり傷を作っていく。

肉体的な危険をかえりみる事なく、クリスは必死で走り続けた。

魔物は本当に追って来ていた。

いつのまにか、魔物は実体を持って、本当にクリスの事を追いかけてきていたのだ。

クリスの背後からは、いつのころからか追跡者の疾走する音がしていた。

かさかさ草をかすめるだけの、軽やかな足取りがクリスに近づいてきていた。

魔物の足は速かった。

その音は、最初は遠くの方でしていただけなのに、見る間にクリスに近づいてきて、もうすぐ近くにまで追いつかれてしまった。

クリスは死にたくなかった。

だから後ろを振り向かないで、破裂しそうになる心臓を押さえて、崩れ落ちそうになる膝を叱咤して、必死で逃げ回った。

どれくらいの間、そうして逃げ回っていたのだろう。



クリスは疲れ果て、くじけそうになっていた。

くじけるのは負けだけれども、もう負けてもいいような気がしてきた。

負けるのは嫌だけれども、死ぬのは嫌だけれども、けど、こんなに苦しいのを我慢するくらいだったら、立ち止まって、一思いに死んでしまったほうがましかもしれないと思ったのだ。

クリスはくじけそうになっていた。

けれども、そんな時だからなのか、希望の光がクリスの前に現れた。

それは文字通り、光だった。

はるか前方。暗い森のはるか遠くの方に、光っているものが見える。

その先に見える夜の空。

それは、森の出口だった。

クリスは助かるんだと思った。

そこまで行けば、魔物は光の下では生きていけないから、だからあそこまでたどり着ければクリスは助かるのだ！

クリスは歓喜して最後の全力疾走を開始した。

魔物はもうすぐ後ろまで来ていたけれども、このペースなら逃げ切れる。

あそこまでたどり着ければクリスの勝ちだ！

クリスは走った。

最後の道程を全力で走り切り、そして光の中へと走りぬけた。

クリスは勝ったと思った。

クリスは勝ったのだ！

森の外にさえ出てしまえば魔物はもう追ってこれない。

もう、危険は無いのだ！

けど、それは間違いだった。

危険は安全だと思っていた森の外にこそあったのだ。

森の外へと走りぬけたクリスは、そこに見えた光景の意味がわからずに、一瞬思考が停止した。

そこには何も無かったのだ。

森も、闇も、そして地面さえも。

そこは森の端にできた崖の上だったのだ。

クリスは慌てて立ち止まろうとした。

けれどもここまで走ってきて蓄えた慣性を殺しきれなくて、間に合いそうに無かった。

クリスは浮遊感を感じた。

まだ崖から落ちてはいないけれども、そこから落ちると考えただけで、心が落ちた気になっていた。

クリスは諦めた。

もう、落下を防ぐ事はできない。

死ぬのは嫌だけれども、落ちたら痛みは一瞬だし、生きたまま魔物に食べられるよりかはいいかもしれない。

クリスは諦めて、崖から落ちる自分を認めた。

けれども、クリスが崖から落下する事は無かった。

クリスが崖から落ちるのよりも早く、魔物がクリスに襲いかかり、クリスを崖の上に押しとどめたのだ。

放心していたクリスは一瞬、何が起こったのかわからなかった。

けど、崖から落ちるのを免れて、その代わりに魔物に捕まってしまった、今から魔物に食べられてしまうのだと理解したら腹が立ってきた。

クリスは魔物に食べられるなら、まだ崖から落ちて死んでしまったほうがましだったのだ。

それなのに、魔物はクリスを捕まえて食べようとしている。

クリスは腹が立った。

魔物はそんなにクリスを食べたいのだろうか。

どうして一思いに死なせてくれなかったのだろうか。

クリスは怒ったので今から食べられてしまう恐怖も忘れて魔物を睨みつけた。

睨みつけられた魔物は、不思議そうな顔をしていた。

いや、それは魔物なんかじゃなかったのだ。

クリスには、魔物がナナの姿をしているように見えた。いや、ナナそのものに見える。

けど、そんな事はないのだ。

ナナは魔物に食べられてしまった。

目の前の魔物はナナを食べてしまったのだ！

……けど、ナナの姿をした魔物がナナを食べたのだろうか？

いや、違う。魔物はナナを食べてナナの姿を乗っ取ったのだ。大昔の映像だとそうだった。

魔物は人間を食べて、その皮を着込むのだ。

だからそういう魔物は皮を引っ張られると醜く皮がずれるのだ。

クリスは腹が立った。ナナの皮を着るなんて許せない！

だからクリスはナナの姿をした魔物の頬を引っ張った。

そのまんまナナの皮をはがそうとした。

そうすればナナの姿は魔物に利用されなくて済むから、だからクリスはナナの姿をした魔物の頬を引っ張ったのだ。

けど、いくら魔物の頬を引っ張ってもナナの皮は剥がれなかった。

ナナの皮は剥がれないで、ただ頬を引っ張られたナナの姿をした魔物が痛そうに顔をゆがめている。

クリスは何か前提を間違えているような気がしてきた。

そしてクリスはどうとつに理解した。

目の前の、ナナの姿をした魔物は、魔物なんかじゃなくて本物のナナだという事を。

ナナは最初から外にいたのだ。

それで、クリスが森には走って行ったから追いかけてきて、崖に落ちそうになったから助けてくれただけなのだ。

ナナは生きていたのだ。

そう考えたら、クリスはなんだか驚いて、嬉しくって、安心して、けど、クリスをこんなに心配させたナナが許せなくて、クリスをこんなに悲しませたナナが許せなくて、けれどもそれよりもなによりも、今まで一人でいて心細かった思いがどっと溢れてきて、クリスはナナにしがみついて泣き出してしまった。

クリスは泣いた。

ナナの胸の中に縮こまって、心細さを解消するために、ずっと感じていた恐怖を解消するために、何も考えないで、何もかもを忘れるために、大声で泣いた。

クリスはナナの胸の中で子供のように泣き続けた。

ナナの胸の中は温かった。

あさのたいよう？

クリスに泣きつかれたナナは戸惑っていた。

ナナに抱きついたクリスから、いろんな感情がナナに流れ込んでくる。

ナナはその感情をどう理解していいものか分からずに、戸惑っていたのだ……

悲しい気持ち。これは悲しい。

クリスは悲しいのだ。何でかわからないけれどもクリスは悲しいのだ。

苦しい気持ち。これは苦しい。

クリスは苦しいのだ。何でかわからないけれどもクリスは苦しいのだ。

つらい気持ち。これはつらい。

クリスはつらいのだ。何でかわからないけれどもクリスはつらいのだ。

怖い気持ち？ そう、これは怖い

クリスは怖いのだ。なんでかわからないけれどもクリスは怖いのだ。

寂しい気持ち？ そう、これは寂しい。

クリスは寂しいのだ。何でかわからないけれどもクリスは寂しいのだ。

許せない気持ち？ そう、これは許せない。

クリスは許せないのだ。何でかわからないけれどもクリスはナナを許せないのだ。

いろんな感情が溢れてくる。全部が全部、嫌な感情。

ナナは分からない。どうしたらいいのか分からない。治めてあげたいけれども、どうしていいのか分からないのだ。

ナナはクリスを抱きしめて、そっと優しく頭を撫でた。

どうしていいか分からないから、ナナにはクリスの感情を治めてあげられないから、せめてクリスに安心して欲しいから、だからナナはクリスを抱きしめてそっと優しく頭を撫でたのだ。

ナナはクリスを抱きしめて、そっと優しく頭を撫で続けた。けれども、クリスは泣き止まなかった。

いつまでそうしていたのか、気がつくとき空が明るくなってきた。

不意に強い光に照らされて、ナナはまぶしくて目を細めた。



何が光っているのか知りたくて、ナナは光っている方を見た。

そこで目に入ってきた光景に、ナナは息をするのを忘れそうになった。

朝の太陽？ そう、これは朝の太陽。

キレイな黄色。

キレイな太陽。

キレイな青。

キレイな空。

キレイな白。

キレイな雲。

キレイな緑。

キレイな森。

キレイな茶色。

キレイな山。

キレイな水色。

キレイな湖。

……世界が色で満ちている。朝の太陽に照らされて世界は色で満ちている。

色が無い月の夜の世界はキレイ。

色で溢れている朝の太陽の世界もキレイ。

世界はキレイ。朝も、昼も、夜も、世界はいつも違う色で、世界はいつも違う音で、世界はいつも全部が違っている。

だから世界はキレイ。

ナナは世界の美しさに見とれていた。

ナナの胸の中からは、いつのまにかクリスの泣き声が消えていた。

そこでは、いつのまにかクリスもまた世界の美しさに見とれていた。

ナナとクリスの二人は、朝日が映し出す景色にいつまでも見とれていた。

## クリスの感動

クリスは放心していた。

朝日が創りだす色に満ちた世界のありように心奪われて、いくら泣いても消えなかった負の感情さえも忘れてその光景に見入っていた。

朝日が創りだす世界がこれほど美しいものだとは知らなかった。崖の上から眺める大地がこれほど美しいもののだとは知らなかった。

クリスはこれだけで旅に出たかいたような気がした。

旅に出なかったらこんな景色を見ることは無かつただろうし、これを見ないということは人生を損しているような気がするのだ。

クリスは美しい景色を目に焼き付けようとその景色を隅々まで見回した。

そして景色を見回していたから、それに気がついたのだ。

崖のすぐ下の方には町並みが広がっていた。

目の前に広がる自然の中で明らかに人の手で作られたその場所は

……

「第二十三番管理区だ！」

そう、忘れていたけれども、そこがクリスの旅の目的地だったのだ。

クリスはなんだか得したような気がした。

こんな綺麗な朝日が見られて、しかもいつのまにか目的地のすぐ近くにまでできていたのだ。

「けど……」

ある事実に行き着いて、クリスを見る間にしぼんでいった。

管理区は崖の下だ。

どれくらいの高さか正確にはわからないけれども、この崖は降りられるような高さではない。

クリスは困り果てた。

迂回していくべきだろうか？

けど、崖はずっと続いていて、簡単に降りられそうな場所など見当たらない。

目的地はすぐそこだというのに、どうしようもないのだろうか。

クリスは困っていた。

「えっ？」

そうしたら、いつのまにか身体が宙に浮いていた。

昨夜と同じように、ナナに担ぎ上げられていたのだ。

ナナは崖に近づいた。

「ま、まさか？」

クリスはまさかと思った。

けど、その通りだった。

ナナはクリスを担ぎ上げたまま、崖から飛び降りたのだ。

クリスは恐怖した。

叫ぶ事すらできなかった。

みなぎるちから？

ナナにはクリスがこの崖の下に行きたいのだと言う事が分かった。

今までのクリスの行動を分析してきた結果、ナナはクリスが何をしたいのかが理解できるようになってきていた。

それにナナにはクリスの感情を感じる能力があったので、クリスがどうしたいのかを理解する事ができたのだ。

ナナはクリスの希望を叶えたいと思った。

クリスではこの崖を降りる事はできないが、ナナにならばこの崖を降りる事ができる事を知っていた。

だからナナはその感情がおもむくままにクリスを担ぎ上げ、崖から飛び降りた。

崖から飛び降りたナナは、そこで今までに無い感情が溢れてくるのを感じていた……

快い気持ち？ そう、これは快い。

空を飛ぶのは快い。落ちていくのはむずむずするけれども快い。

爽やかな気持ち？ そう、これは爽やか。

風を感じるの爽やか。風が身体を抜けていくのは爽やか。

力強い気持ち？ そう、これは力強い。

身体を動かすのは力強い。身体の潜在能力を発揮して、大地を蹴るのは力強い。

興奮の気持ち？ そう、これは興奮。

自然に挑むのは興奮する。自然に打ち勝つのは興奮する。

身体を動かすのは快い。

身体を動かすのは爽やか。

身体を動かすのは力強い。

身体を動かすのは興奮する。

身体を動かすのは気持ち良い！

ナナは身体のおもむくままに空を翔け、大地を蹂躪し、崖の下を目指し続けた。

ナナは自分の身体が発揮する能力に酔いしれ。陶醉していた。

だからナナの上でクリスが失神しそうなほどに恐怖を感じている事にも、ナナは気がつかなかった。

## クリスの恐慌

クリスは放心していた。

それはもう、口から魂が抜け出そうなほどに。

無事に崖の下までたどり着いたのは奇跡だと思った。

ありえない出来事を無事に切り抜けたその強運に、思わず日頃の行いの良さに感謝した。

近くではナナがはしゃぎ回っている。崖を降りた時の興奮が抜けないのだろう。

クリスは放心していた。

何も考えられなかった。

頭の中では崖から飛び降りたに見えた光景がフラッシュバックしている。

耳元では崖から飛び降りている最中の獰猛な風の頭までも鳴り響いている。

ナナが近寄ってきた。

けれどもクリスは放心していたからそんな事には気がつかない。

クリスは放心していた。



心は恐怖に支配されていた。

身体は興奮して痙攣していた。

ナナがクリスの手を取り、握った手をぶんぶんと上下に振った。

興奮冷めやらない状態のようで、その仕種には攻撃性のものが含まれていた。

クリスは反射的にナナの手を振り解き、ナナの頬を思い切り張り倒した。

自分が何をやっているのか分からなかった。

頭が働かなかった。

恐怖に心を縛られていた。

欠如しているはずの闘争心が防衛本能の名を借りて爆発しそうだった。

クリスはナナの顔を見た。

酷く傷ついたような顔をしていた。

その顔を見て、クリスは泣きそうになった。

傷ついたのはこっちだ。

何でそんな顔をされなくてはならないの！

「ナナのバカァー！」

だから逆にこっちが傷ついて、堪えきれなくなつて、クリスはナナの胸に顔をうずめ、その胸を叩きながら泣き出した。

何で傷ついたのか、何で泣いているのか、さっぱり分からない。

クリスはナナの胸の中で泣いた。

いつのまにか、ナナもクリスを抱きながら泣いていた。

だからクリスもナナを抱き返して泣き続けた。

朝日が照らし出す崖の下で、二人は一緒に泣き続けた。

こっかい？

クリスに頬を叩かれたナナは、一瞬何が起きたのか分からなかった。

クリスを見たら、怖い目でナナを睨んでいた。

どうしてクリスがそんなことをしたのか分からなかった。どうしてクリスがそんな目をしているのか分からなかった。

クリスがナナの胸を叩きながら、その胸の中で泣き始める。クリスが感じる感情がナナの中に流れ込む。

クリスの感情が流れ込んできたおかげで、ナナはクリスが泣いているのがナナのせいだということが理解できた。

クリスが泣いているのが自分のせいなのだと分かったら、嫌な感情が胸の中に溢れてきた。

嫌な感情に耐え切れなくて、ナナは泣き出した。

初めて自分の中に湧き上がった負の感情に翻弄されてしまい、どうしていいか分からずに、自分の感情を分析する事もできずにナナは泣き続けていた……

苦しい感情。 悲しい感情。 つらい感情。 怖い感情。 寂しい感情。  
許せない感情……

嫌な感情が溢れてくる。感じたくない感情が溢れてくる。

嫌な感情がナナを責める。

後悔？ そう、これは後悔。

ナナはクリスを泣かせてしまった。ナナはクリスが嫌な事をして、クリスを泣かせてしまった。

だから後悔しているのだ。クリスが嫌だと知らなくて、クリスが嫌な事をしてしまったから、だからナナは後悔しているのだ。

ナナは自分が許せない。

そんなことをしてしまった自分が許せない。

自分だけが楽しくて、クリスを怖い目にあわせてしまった自分が許せない。

けど、許されたい。

ナナはクリスに許されたい。

怖い目にあわせてしまったけれども、もうしたくないし、絶対にやらないから許されたい。

ナナは許して欲しくてクリスを抱いて泣いた。

クリスにすぎるように、しがみついて離されないようにして泣き続けた。

そうしたら、クリスもナナを抱き返してくれていた。

ナナの中にクリスの感情が流れ込んでくる。

苦しみの感情が流れ込んでくる。悲しみの感情が流れ込んでくる。つらい感情が、怖い感情が、寂しい感情が、許せない感情が流れ込んでくる。

ナナの中にクリスの負の感情が流れ込んでくる。

けれども、負の感情が薄れていったと思ったら、今度はナナの中に、クリスの正の感情が流れ込んできた。

ナナの後悔の感情の中に、クリスの優しい感情が溢れてくる。ナナの黒い感情の中に、クリスの白い感情が溢れてくる。

癒しの心？ そう、これは癒し。

クリスの感情がナナを癒してくれている。クリスのいたわりがナナを癒してくれている。

ナナは泣きながらクリスを見た。

クリスはもう泣いていなかった。

けど、ナナは泣き続けた。クリスの胸に抱かれながらナナは泣き続けた。

クリスが泣き止んで嬉しいけれども、ナナはナナが許せないから、

だから泣き続けた。

ナナは泣き続けた。けれども、ナナが泣いている間中、クリスがナナをずっと癒してくれていたから、ナナはやっぱりナナが許せなかったけれども、クリスのおかげで泣き止む事ができた。

ナナは恐る恐るクリスを見た。

クリスを見ると、クリスが笑ってくれた。

だから、ナナもクリスに笑う事ができた。

## クリスの成長

クリスはほっとしていた。

ナナがようやく泣き止んでくれて心底ほっとしたのだ。

そりゃあクリスも泣いたけれども、ナナが泣き出して二人で一緒に泣いていたら、なんだかすっきりしてしまった。

だからクリスは泣き止んだ。けれども逆にナナが泣き止まなくて、クリスは戸惑った。

そうしてナナが泣き止むようにあやしているうちに、クリスは理解した事があったのだ。

そう、ナナはリターナだけど自分と同じような人間で、しかもまだ保護区で暮らしているような生まれただけの幼児も同然の経験しかしていないのだ。

最初は、ナナはリターナだから自分の意志はないし、感情なんてないと思っていた。

けれどもナナは感情があるし、胸に抱かれると気持ちいいし、自分よりすごい能力を持っているのだと知った。

だからクリスはナナに頼ろうとしてしまっていたけれども、それは間違いなのだ。

実際にはクリスの方がまだ経験豊富で、ナナを守ってあげなくて

はいけない立場なのだ。

クリスの中に保護欲が生まれた。

ナナが、とても身近な存在に思えてきた。

クリスが泣いて、ナナも泣いて、二人で一緒に泣いたから、だから互いに互いの事を理解できたような気がする。

泣き止んでクリスを見て笑ったナナに、クリスはナナとの絆が生まれたような気がしていた。

そしたらなんだか急に恥ずかしくなってきた。

ナナはそんな事がないようで、今までそんな事なかったのににことクリスに笑いかけてべたべたしてくるから、クリスはさらに恥ずかしい気持ちになった。

だからクリスはナナから顔をそむけた。

けれどもナナはそんな事全然気にしなくて、クリスの背中にへばりついてきた。

認めるのはしゃくだけど、なんだか悪い気はしなかった。

と、そこでようやくクリスは目的を思い出した。

そう、今は旅の途中で目的地はすぐそこにあるのだ。

なんかもうそんな事どうでもいいような気がしてきたけど、一度



思い立った事はきちんとやり遂げなくてはなんだか駄目なような気がする。

「行くよ、ナナ」

クリスがそう言って歩き出すと、ナナはクリスにくっついて後に続いて歩いてきた。

ナナにへばりつかれて歩きづらかったけれども、目的地にはすぐに着いた。

管理区の中に入ると、ちょうどいい事にすぐ側に男が歩いていた。

「おはよう!」

その男に後ろから声をかける。

すると、男は驚いた様子で振り返り、クリスを見た。

クリスを見た男が驚きの表情を見せる。

しかし、驚きが過ぎるとその目はなんだか険悪なものへと転じていった。

クリスはその目になんとか怖いものを感じて、その男に背を向けて、慌てて管理区の中に逃げる。

その後ろにナナも続いた。

クリスは今のはなんだっただろうかと思ったけれども、あまり

気にしないで管理区の中を歩き回る事にした。

そうしたら、今度は前の方から男が歩いてきた。

男はクリスを見るとやっぱり驚いた様子で、今度はつらそうな顔をして逃げるように脇へと歩き去ってしまった。

クリスはなにかがおかしい気がしたけれども、管理区の中を歩き続けた。

管理区でクリスを見た男達は、だいたいが先の二件のケースと同じような行動を取った。

つまり、クリスを睨みつけるか、つらそうな顔で逃げていってしまうのだ。

歩いているうちに、クリスはそれ以外にもこの管理区に違和感があるように感じた。

そして歩きながら管理区の人達を観察しているうちに、その違和感の招待にクリスは気がついた。

そう、この管理区には女の姿がないのだ。

それがどういう意味なのかを考えようとしたら、前の方の道から慌てたようにクリスの方に走ってくる男の姿を見つけた。

「すまんけどお嬢ちゃん、一緒に管理区の外に来てくれないか？」

男はクリスの前に立つと、硬い表情でそう言った。

男の口調は口調こそ優しかったものの、有無を言わせない迫力があつた。

クリスは事態が飲み込めなかつたけれども、怖いから頷いて男の後について管理区の外に出る事にした。

堅い表情をしていた男は、クリスを連れて管理区の外に出ると、ようやく人心地ついたかのように息をつき、表情を崩した。

「いやあ、危なかつたねお嬢ちゃん。この管理区に女が入っちゃ危ないんだよ」

表情を崩したものの、男の顔はやはりこの管理区の男達にあつたような険悪なものをまもっていた。

「どづいつ事？」

クリスはさつぱり訳が分からなかつたから、率直に男に聞いた。

けれども、男は渋い顔をするだけで話そうとはしなかつた。

「どづいつ事！」

クリスは今度発揚口調で男を問い正した。

すると男は渋い顔をクリスに向けて、

「聞かない方がよいよ」

とだけ言った。

そんな事でクリスは納得できなかった。

「クリスは聞きたいの！」

だからもつと強い口調で男に怒鳴った。

すると、男の顔に怒気が生まれた。

その感情の強さにクリスは圧倒されて、一瞬金縛りにあったかのように動けなくなった。

けど、男がその表情を見せたのは一瞬で、次の瞬間には元の微かに険があるけれども柔和な顔に戻っていた。

「聞かない方がいいと思うけど、けどお嬢ちゃんは言ってもきかなそうだからな。」

……まったく、女つて奴はなあ。

話してもいいけど、後悔するよ？

それでも聞きたいのかい？」

クリスは男の不気味な感じに圧倒されかけたけれども、それでも好奇心が勝った。

「それでも聞きたい」

クリスの言葉を聞くと、男はやれやれといったように首を振り、近くの岩の上に座ってくつろいだ姿勢をとった。

足の上に肘を置き、手の指を合わせるように顔の前に置くと、男はクリスの顔を見てこう切り出した。

「それじゃあ聞かせてあげよう。なんでこの管理区に女が入ると危ないのか。

聞けば後悔するだろうし、言えるような話じゃないんだが、お嬢ちゃんに話してあげないとまた管理区の中をうろつきそうだからね。

まあ、少し長い話を聞いて、後悔して、納得して帰ってもらおうか」

## 第二十三番管理区の男の話

そうだね、どこから話そうか。

まずは確認をしておこう。

お嬢ちゃんのところも性は三つに分かれているかい？

男性に惹かれる女性と、中性に惹かれる男性と、誰にも惹かれな  
い中性に。

え？ そんなの常識だった？

はは、まあそうなんだろうねえ。うちの間でも常識だよ。

お嬢ちゃんは管理区に女性がいなかったのに気がついたかい？

ほお、気がついたのかい。目がいいねえ。

けど、いないのは女性だけじゃないんだよ。うちの管理区には中  
性もないのさ。

つまり、うちの管理区には男性しかいないってことだ。

何でそうなったのかって？ まあ、話を焦るもんじゃないよ。筋  
道を立てて教えていくから。

……そうだね。うちの管理区になんで男性しかいなかったってえと、  
まあ簡単に言えば、みんな死んじゃまったからなんだよ。

そう、女性も中性も全員。

病気がって？

いや、それなら男性だけ生きているのは変だろう。

男性はかからない病気だって？

はは、確かにそれなら話のつじつまは合うわな。それならまだマシだったんだけど、事実は違う。

事実はな、みんな殺されちゃったし、殺しちゃったんだよ。

中性も女性もな。

女性が中性を殺して、男性が女性を殺した。簡単な話だろ？

おお、怯えてるねえ。まあ無理も無い。だから聞かなきゃよかったんだ。

え？ 俺も殺したのかって？

ああ、殺したさ。一人だけ、女性を殴り殺したよ。

何で殺したのかって？

そりゃあ……ここがやり切れないところってやつだな。

別に俺達だって殺したかったわけじゃないさ。

けど、先にやったのは女性だし、俺達男性はやり返さなきゃ気がすまなかったのよ。

女性はな、嫉妬の炎に焼かれて中性を皆殺しにしゃがったのよ。

まあ、仕方ないのかもな。

男性は中性に振り向いてもらえなくても中性は誰にもなびかないからまだましだが、女性は男性を好きになっても男性はなびかないどころか他の中性を追いかけてばかりいる。

そんな光景を見るのに耐えられなかったんだろっねえ。

最初はな、小競りあいだったのよ。

男性と女性と中性が鉢合わせして、女性が難癖つけていたんだ。

けどな、それが取っ組み合いの喧嘩になって、勢い余って女性が中性を殺しちまった。

それだけならまだマシだったんだけど、中性を殺した女性がその場で女性を扇動し始めたのよ。

「中性がいるからこんな目にあうんだ。状況を変えるには中性を皆殺しにすればいい」ってな。

まあ、女性はみんなそう思ってたんだろっな。そしたらもっ、それからは雪崩みたいな勢いよ。



女性はな、もうそれを聞くや否や、そこらへんから先の細いものを持って集まって、中性を虐殺し始めた。

男性はもう何が起きているのやら理解の外だったし、襲われた中性は女性の勢いに圧倒されて、反撃するどころじゃなかった。

一時間後には息のある中性はいなかったよ。

俺達男性はその地獄絵図に呆然としていた。

中性を皆殺しにした女性も、終わった後は放心したように立ち尽くしていた。

女性よりも早く我に返った男性は、それから男性だけで集まって会議を開いた。

そこで、全会一致で中性を皆殺しにしようって事で決まったのよ。

後は同じ事の繰り返し。

中性を殺して放心してる女性どもを男性が殺して回った。

まあ違う事と言えば、女性と違って武器を使うよか素手で殴り殺してた奴の方が多いってところかな。

復讐が終わったら俺達も気が抜けちゃってさ、放心してる間に保護者が来て、後片付けは全部やってくれたよ。

しかし、嫉妬やら殺意やら復讐心やら、あの感情は性質が悪いねえ。

なにせ抱いてる時は楽しいけど、やっちゃまった後は後悔するからねえ。

え？ お嬢ちゃんにはそんな感情は無い？

ああ、それはそうだろうねえ。

こんな事があつたから、保護者がそれから製造する人間を改良してそんな感情抜き取っちゃつたからねえ。

そんなのは知らないって？

そりゃそうだろうねえ。保護者はそんな事言わないだろうし、お嬢ちゃんみたいに違う管理区に行こうなんて酔狂な奴はめつたにいないからねえ。

実際、ここ数十年でここに他の管理区から誰かが来た事なんて、これで二度しかないんだからなあ。

けど、保護者が俺達の構造をいじくっているのは本当の事さ。

お嬢ちゃんはそんな感情持ってないらしいけど、うちらはみんな持つてるからねえ。

まあ、ともかく話はこれで終わりだ。

どうだい、聞かなきゃよかっただろ？ 後悔しただろ？

じゃあ帰りな。

ここにいてもろくな事は無いよ？

もしかしたら昔の恨みをご大層に抱えている連中もいるかもしれないし、命があるうちに帰った方がいいてもんだ。

……正直な話、お嬢ちゃんを見ていると、俺も歯止めが効かなくなりそうなんだよ。

かぜのこえ？

第二十三番管理区から出たクリスとナナは、管理区から遠く離れた草原にいた。

両脇を崖で囲まれたその谷の中の草原は、強い風が吹き荒れていた。

ナナは、その草原の中にぽつんと存在していた大きな岩の上に立って、風を感じていた。

その下では、クリスが岩に寄りかかってじっとうつむいている。

草原に吹く力強い風。

その風を全身に受けながら、ナナは高尾の家からクリスに連れ出されてからの丸一日の記憶を反芻していた……

いろんな事があった。

いろんな物を見た。

いろんな音を聞いた。

いろんな感情を感じた。

流れていく木を見た。身体を抜けていく風を見た。降りしきる雨

を見た。月の光を見た。月が映し出す世界を見た。朝の太陽を見た。朝日が映し出す世界を見た。

風の音を聞いた。雨の音を聞いた。大地の音を聞いた。森の音を聞いた。葉っぱの音を聞いた。空の音を聞いた。

楽しい気持ちを感じた。不思議な気持ちを感じた。面白い気持ちを感じた。楽しい気持ちを感じた。苦しい気持ちを感じた。悲しい気持ちを感じた。つらい気持ちを感じた。怖い気持ちを感じた。寂しい気持ちを感じた。快い気持ちを感じた。爽やかな気持ちを感じた。力強い気持ちを感じた。興奮する気持ちを感じた。後悔する気持ちを感じた。癒しの心を感じた。

風の声が聞こえた。

風に乗って、八チの声が聞こえたような気がした。

風が、八チの顔を思い出させた。

ナナは今回の旅で見たもの、聞いたもの、感じたものを八チに話してあげたいと思った。

ナナは、八チに会いたいと思った。

## クリスの帰郷

クリスは考えていた。

今回の旅で知った事を、自分の弱さや強さの事を、サンタやケイの事を、ナナ達リターナの事を、第二十三番管理区の事を、保護者の事を、その全ての事を考えていた。

クリスは考えて考えて、そして考える事を止めた。

考える事はクリスらしくない。クリスはクリスが見たもの、聞いたもの、感じたものをそのまま受け入れるのがクリスらしいのだ。

クリスは一人頷いた。

そう、考えるのはクリスの役目じゃない。

考えるのはサンタの役目なのだ。

だから、今回の旅で見て、聞いて、感じたものをサンタに話してあげようと思った。

クリスはいろんな物を見て、いろんな事を聞いて、いろんなものを感じて、変わったと思う。でも、変わったと思うけれども、やっぱり変わっていないのだ。

変わったけれども変わらない。

クリスはサンタの事が好きだ。クリスはナナの事が好きだ。ハチ

の事もケイの事も、みんなの事が好きだ。

いろんな事を見て、いろんな事を聞いて、いろんな事を感じたけれども、それでもその事が変わるはずが無かった。

だから変わっていない。

クリスの中で何かが変わったかもしれないけれども、大事な事は変わっていないのだ。

クリスは空を見た。

空はどこまでも青くって、雲は限りなく白くって、風は力強く草原を揺らしている。

空に浮かぶ雲にサンタの面影を見たような気がした。

クリスは、なんだか急にサンタに会いたくなった。

だから、会いに行こう。

「ナナ、帰ろうか」

クリスは寄りかかっている岩の上にいるナナに声をかけた。

ナナは、笑顔で頷いた。

クリスは心の中で旅の終わりを宣言した。そして、次の旅の始まりを感じた。

いろいろな物を見て、いろいろな音を聞いて、いろいろな感情を感じたから、今度は家に帰ってその話を聞かせてあげるのだ。

それこそが、新たな旅だ。

ここにひとつの旅が終わり、クリスはまた新たな旅に出た。



### 第三部 帰還者

「どうにもまずい事になっている」

「どうしたんだ？」

「どうやらこちらの動きを察知されたらしい。ナノロイドが彼の家に向かっている、それに追いつけそうに無い」

「そうか……」

「君も複雑な立場だな。」

私がナノロイドに出し抜かれれば賭けは君の勝ちになるが、そうならば君は君の関係者を犠牲にする事になる。

いずれにせよ一利一害。

どちらに転んでも利は有るが、その代わりにどちらに転んでも大事なものを無くす事になるのだからな」

「分析するのは止めてくれよ、姉さん。」

その分析能力は確かにあなたの長所だが、それを他人の心情を考えずに口に出すのは短所だと思う」

「ふふ、まあそう怒るな。」

しかし、これで賭けに決着が着きそうだな。

彼が回収される前に私が間に合うか、それとも間に合わずに彼が回収されてしまうか。

これまでの例を見れば、もはや彼以上に良い結果は出そうに無い。間に合えば私の勝ち。間に合わなければ君の勝ちに決まりそうだ…

…」

## 来訪者

話はクリスとナナが旅に出る前に戻る。

クリスが高尾の家に訪れる直前の事。そこには一人の来訪者があった。

彼が来た時、高尾は椅子に座っていつものように本を読んでいた。

ハチはその近くにいて、興味深そうに高尾の横から本を覗き込んでいたし、ナナはそこから少し離れたところで、窓から外を眺めていた。

彼が玄関を叩いた時、高尾はそれは、ケイが来たのだと思っていた。

この家を訪ねるのはケイとクリスしかないし、クリスは玄関など叩かずに家に乱入してくるからだ。

だから高尾は読みかけの本を開いたまま机の上に置き、上機嫌で玄関へと向かった。

ハチもその後ろについてきた。

玄関を開けて来訪者の姿を見た時、高尾は少し予想外な来客に戸惑った。

彼がここに来た事など一度も無かったからだ。

そして同時にまずい事になったと思った。

高尾は彼に隠している事があつたし、その隠している事が高尾のすぐ後ろで興味深そうに彼の事を見ているのだから。

彼は銀色の大時代な鎧をまといはいるものの、見た感じは普通の人間に見える。

ただ、少しだけ違うのは、右の頬にA 17という赤い文字が浮かんでいる事だ。

その文字こそが彼の存在を明確に表していた。

右の頬に浮かぶ番号。

それは、保護者の階級を表しているのだ。

そう、来訪者とは、保護者だった。

恐らく高尾がリターナを匿っている事がばれたのだろう。その事で保護者が来たのは明らかだった。

高尾は少し厄介な事になったとは思つたが、大して心配はしていなかった。

どうせ注意されて終わりだろう。

保護者は基本的に人間に干渉しないし、いざとなれば命令すれば保護者は命令を聞くしかないのだ。

高尾はそう思っていた。

けど、そんな予想は呆気なく裏切られた。

「リターナを回収します」

そんな言葉とともに、高尾は風が横を通り過ぎるのを感じた。

いや、それは風などではなかった。

保護者がハチを捕まえるべく、目にも止まらぬ速さで高尾の横を通り過ぎたのだ。

微細な機械の集合体である保護者は人間の形こそしているものの、その形の元となった存在の持つ能力になど縛られていない。

知識は無限、思考力は人間と同程度、運動能力に関していえば人間などとは比べものにならない能力を有しているのだ。

高尾は驚いて保護者を見た。

けれども、その時には保護者にはいなかった。

連続的に地面を叩くような音を聞いて、家の外へと視線を転じる。舞台はいつのまにか家の外へと移動していた。

そこでは、ハチが保護者から逃げ回っていた。

飛び、しゃがみ、驚いたような表情で、掴みかかってくる保護者から器用に身をかわしている。

驚いた事に、八子は保護者と同程度の運動能力を有していた。

八子と保護者はまるで舞っているかのように互いの立ち位置をうまく変えて攻防を繰り返している。

その見事なまでの身体の動きは、高尾が思わず見とれてしまうほどのものだった。

しかし、高尾はある事に気がついて我に返った。

わずかだが、保護者に比べて八子の方が動きに切れが無いのだ。

八子の顔を見て、高尾はそれがなぜなのかを理解した。

八子は、いきなり襲われた事に驚き、戸惑いから脱しきれないでいるのだ。

このままでは八子が保護者につかまってしまう事は明らかだった。

「逃げる！」

だから高尾は八子に向かって叫んだ。

今は逃げて、心の動揺が収まるまで待つ事が八子には必要なのだ。

別に八子が捕まったところで高尾が失うものは無い。

それどころか、そうなれば高尾はもう、高尾が知ってしまった事実に怯える必要など無い。

しかし、高尾は迷う事無く八手に必要な指示を八手に与えていた。不思議な事に、そこに迷いは一片も無く、後でそんな事実に至る事すらもなかった。

八手はその言葉に頷いた。頷いて、保護者に背を向けて逃げ出した。

保護者がその後を追いかける。

二人は人知を超える速さで鬼ごっこを開始した。

二人の姿が見る間にはるか遠方へと過ぎ去っていき、管理区を出て見えなくなる。

高尾は二人のその速度を見て、後を追いかけるべきかしばし逡巡した。足の遅い高尾が走ったところで、追いついてもすでに結果はでてしまっているかもしれない。

けれども、考えたのはわずかな時間で、高尾はすぐに二人の後を追いつめた。

もし助けられる事があるのなら八手を助けたい、と高尾は素直に思ったのだ。

高尾は自分の出せる精一杯の速度で二人の後を追った。

「サンタァー」

高尾と八手が去った直後。そんな怒鳴り声とともに高尾の家を訪

れる存在があった。

高尾の家を訪れたクリスはそこで高尾とは違くない事を知る。

そして当事者の苦勞など知らずに八つ当たり気味に怒鳴り散らし、ナナを連れて旅に出るのだった。

## 戦い

結果からいえば、八チが保護者に捕獲される事は無く、高尾は全てが終わる前にその現場に間に合った。

その場所にたどり着いた高尾は、そこに繰り広げられている光景を見て呆気に取られた。

それはもう、保護者による八チの捕獲という次元のものではなく、八チと保護者との戦い。いや、すでに戦争とも呼べる次元のものになっていた。

管理区から一番近い山の中腹に二人はいた。

しかし木が生え茂っていたはずのその場所にはすでに緑は無く、まるで最初からそこは岩山だったかのように更地になっていた。

二人のいる場所を確認するのは簡単だった。管理区から出た後、二人がどこに行ったのかと思っていたら、突然、山の方で爆発音が鳴り響き、山の緑が削れはじめたのだ。

高尾に被害が及び事を恐れたのか、遠くから見ていた時には爆発音が飛び交っていたのだが、高尾が来てからは爆発物はなりを潜めていた。

その代わりに、保護者の右手は鋭利な刃物上のものになっており、左手には異様に口径の大きな銃のようなものを構えていた。

一方、八チは、服こそぼろぼろだったものの、遠くから見た感じ



では外傷は無く、息すら乱していない。

高尾がそんな風に両者を観察している間にも、二人の戦いは続いていった。

保護者が八手に接近し、高尾には目で追うのさえ難しい速度で刃物状の右腕を振るう。

保護者が身体を変化させて作り出した刃は、それこそこの世のどんな物体ですら両断できる切れ味のはずだが、リターナを持つ特殊能力で硬化した八手の腕はそれすらも通さない硬度らしい。

人間ならば回避不能なその攻撃を、八ちは保護者の動きが見えているらしく、右腕を使って弾き返していた。

それでも保護者は容赦なく右腕を振るい、やがて八ちはその場に押しとめられた。

動きの止まった八手に向けて、保護者の左手の銃が狙いが定まる。

保護者が引き金を引いた。異様に口径の大きなその銃から弾丸が飛び出す。

飛んできた弾丸を、八ちは右腕で振り払った。

弾かれると思われたその弾丸は、しかし八手の右腕にまとわりつき、離れない。

着弾の衝撃で飛び散った弾丸の欠片が地面に舞い落ちる。

粘性を持つらしいその弾丸の欠片は、地面にへばりつくともジユワジユワと泡を立てて地面を溶かし始めた。

粘性を持つ強酸性の弾丸。

それは、明らかにリターナ対策のもののように高尾には思えた。

リターナはある一定以上のダメージを受けると肉体を硬化させる。

そのために、一時的に行動不能にする効果はあるものの、基本的に刃物や爆発物は効かない。

リターナのダメージに対する肉体の硬化性。

その性質を逆に利用したのが今の粘性強酸弾なのだ。

確かに肉体が硬化すれば刃物も爆発物も効かないが、しかしそれは、逆にある一定以上のダメージを受け続ければ、その部分は硬化して動かなくなるという事なのだ。

どうやら保護者はリターナと以前にも戦った事があるか、もしくは研究し尽くしているようだった。

そうでなければこれほど効果的な武器を思いつき、携帯してこないだろう。

八手の右腕は粘性強酸弾に侵食され、肘の部分から動かなくなつた。

しかしもとより八手は右腕を盾として使っていたので、その意味

では保護者の攻撃は効いていない。

つまりは状況は全く変わらず、戦いは続行されていた。

保護者の攻撃は苛烈を極めた。

しかし、ハチはその全ての攻撃を右腕一本で受け止め切っていた。

高尾は目の前のあまりに圧倒的な光景に思わず目的を忘れていたが、しかしハチの顔に苦悶の表情が浮かぶのを見て、自分が何をしに来たのかを思い出した。

そう、高尾はハチの応援に来たのだ。

しかし、この状況で自分に何ができるといえるのだろうか。

二人の戦いの速度についていけない以上、指示を出す事なんてできないし、だいいち保護者に対する効果的な対処法なんて思いつかない。

保護者は微細な機械の集合体であるから、切られようが叩かれようが痛みすら感じない。

それどころか切られたとしても切断面を合わせれば再生するだろう。

例えば爆発物で粉々にされてもある程度の大きさの破片が残れば再生は可能だし、機械だから水や電気に弱いのは確かだが、保護者を形成している細胞とも呼べる微細な機械の一つ一つには、耐水・耐電加工が施されている。

つまり、こと戦闘に関していえば保護者に弱点など無いのだ。

高尾は無力感に苛まれつつも必死で対策を考えた。

もし、あの粘性榴散弾が八子の膝や足の関節に当たりでもしたら、それだけで無力化されてしまう。早く対策を考えなくてはならない。

だが、焦り、思考しようとする心とは裏腹に、頭には泣き言ばかりが浮かんできた。

まさか保護者と争う日が来るなんて思っても見なかった。僕達は文字通り保護者に保護されてきた身の上だし、保護者に争うはめになるなんて想像できるわけが無い。ましてや保護者に対する対策なんて……いや、保護者？

高尾は肝心な事を忘れていた自分を怒鳴りたい気分だった。

そう、相手は保護者なのだ。保護者は人間の命令に逆らう事ができない。

「A 17、戦闘を止める」

高尾は保護者に命令した。

階級番号に続き命令の言葉を唱える。

そうすればその命令は保護者に強制されるはずだ。

そのはずだった。

だが、実際にはその命令は強制力を持たなかった。

まるで高尾の言葉を見捨てるかのように、保護者は黙々と八子と戦い続けている。

高尾は脳の奥の方で何かが砕けるような音を聞いたような気がした。

保護者が人間の命令を聞かないなんてありえない。

それは、高尾の世界観が崩壊する程の出来事だったのだ。

高尾は、信じられないものを見るような思いで呆然と目の前の戦闘を眺めていた。

何も考えられなかった。何が起きているのか分からなかった。

現実味がまるで無い。そんな事はありません。

ひょっとしてこれは現実ではないのではないか？

実は今は夜で、僕はベットの中で夢を見ているんじゃないか？

しかし、高尾のそんな現実逃避気味の思考は、保護者の新たな武器の威力を見て掻き消えた。

不意に保護者が八子から離れる。互いに十分な距離をおいてらみ合う。

それを見て、もしかしたら今頃になって命令が効いたのではないかと高尾は期待した。

しかし、そんなはずは無かった。

保護者は、目にも止まらぬ速さで左手の銃を腰に下げた、より口径の大きな銃と変更すると、それを八チに向けて撃ち放った。

飛び出した弾丸は、一つではなく無数に存在していた。

まるで散弾銃のように拡散して八チに襲いかかる弾丸は、散弾銃よりも広く拡散し、八チの退路を絶った。

八チは後ろに飛びのきながら背中を向けて丸まり、散弾を背中に受けた。

がしかし、完全に背中で受けきる事はできず、散弾の一つが八チの右足首に当たる。

八チは着地すると左足だけで跳躍し、一飛びで保護者に迫った。

保護者が引き金を引き散弾が再び発射される。

しかしその散弾が拡散するよりも早く八チは散弾を左腕で払い、右腕で保護者の銃を殴りつけ、砲身を折り曲げて地面に落とす。

そして再び戦いが始まる。

だが、戦いを再会した八チの動きは明らかに鈍くなっていた。

右足首に粘性強酸弾を受けたため、右足首が硬化して自由に動けないのだ。

いよいよ状況が差し迫ったものになったことを知って、高尾は逃避した世界から帰ってきた。

早く、対策を出さなくてはならない。

ハチのあの動きではもうそんなに長くは逃げ切れないだろう。

今すぐにも対策を出し、それを実行しなくてはハチは捕まってしまう。

高尾は必死で考えた。

今までに無いほどに頭が目まぐるしく回転する。

そして高尾は一つのアイデアを思いついた。

そのアイデアを思いつくや否や、高尾はその考えを吟味するよりも早く動き出した。

保護者対策といっても、高尾は何も特別な事をするわけではない。

高尾はただ、二人が戦っているその戦場に向かって走り出したのだ。

高尾の思いついたアイデアはこういう事だ。

保護者は人間に危害を加える事ができない。

だから高尾が二人の間に割り込めば保護者は攻撃を止めるだろうと。

しかし、保護者が人間の命令を拒否した現状では、それは当てにならない約束事だった。

高尾が二人の間に割り込んでも、保護者は高尾を無視して高尾を巻き込んで八手を攻撃するかもしれない。

走りながら高尾は考える。

だがしかし、それでも保護者が攻撃を止める可能性は高いだろう。

保護者は高尾がこの戦場に姿を現すと同時に爆発物の使用を止めた。

それは、高尾に危害を加えなくなかったためだろう。

それは単に爆発物は八手には効かないと判断したためかもしれない。

だが、それでも高尾は保護者が人間の保護者だという事を信じたかった。

これは賭けだった。

高尾の生涯で初めての賭け。

人生で最初で最後になるかもしれない命を賭けた賭博だった。



もちろん、この賭けには八子の自由や高尾自身の命がかかっている。

しかし、それよりも大事なものを高尾は賭けていた。

自分が保護者に殺されるという事は、自分の死とともにもう一つのもものが崩壊する事を意味する。

つまり、自分が保護者に殺されるという事は、保護者と人間との絆が幻だったという事を証明する事になるのだ。

それは、自分が生まれた世界。

自分が暮らした世界。

自分が信じていた世界が崩壊する事と同義だ。

高尾が賭けていたもの。

それは、自分の世界　保護者に保護されている人間の世界そのものだった。

高尾は絶叫しながら二人の間に乱入した。

自分でも訳の分からない事を叫び、少しでも二人が自分の存在に気がつくように大きく手を上げて振りながら、しかし現実を目の当たりにする恐怖に打ち勝つ事はできずに目を閉じて、二人の間に割り込んだ。

二人の間に入り込んだ高尾は、ぴたりと動くのを止めた。

舞台上に乗り込んだ高尾は、金縛りにあつたかのように動けなくなつてしまつた。

あまりの恐怖に筋肉が硬直し、身じろぎ一つできなくなつてしまつている。

その筋肉の硬直はまぶたにも影響を及ぼし、高尾は目を開く事もできず、暗闇の世界から抜け出す事ができなくなつてしまつていた。

暗闇の中で考える。

一瞬後には保護者の右腕が自分を切り刻んでいるかもしれない。

一瞬後には粘性榴散弾が自分の身体を跡形も無く溶かすかもしれない。

そう考えると恐怖が肉体を支配して、音を聞く事すら拒否し始めた。

世界が静寂に包まれる。一瞬が長く感じられた。刹那の時が一秒にも感じられた。

それでも一秒が過ぎ、二秒が過ぎ、やがて十秒が過ぎた。

そこまで時間が経過すると、高尾もようやく自分が賭けに勝つた事を信じられるようになった。

そう、自分は賭けに勝つたのだ。世界の崩壊は免れたのだ！

「恐怖が消え、歓喜が湧き上がり、肉体が恐怖の呪縛から解かれる。

高尾は目を開き、自分が勝ち取った世界を見た。

そうしたら、そこには少し意外な光景が広がっていた。

世界は光量を落とし、辺りは薄暗くなっていた。

太陽が雲に隠れたのだろうか？ いや、それならこの周りだけが薄暗く、遠くの山の方が明るいのはおかしい。

周りを見る。

急に暗くなった空の下で、保護者も八子も、ぼかんと口を開けて空を見上げていた。

つられて高尾も空を見上げる。

すると、そこに見えたものに、高尾もやはりぼかんと口を開けてそれに見入ってしまった。

高尾の視点が上空に向き、一つの存在に焦点が合わさる。

焦点の調節が済み、目が巨大な存在を像に結ぶ。

長細い、葉巻のような形の飛行物体。

それは最近、各地に現れている、人間をさらい、リターナを放棄している宇宙船だった。

## 真実

高尾達が呆気に取られている間に、宇宙船は何の予備動作も無くすつと動き出し、高尾達のすぐ横に音も無く着地した。

船体の脇のハッチが開き、そこに人影が現れる。

その人影は、宇宙船から出てきて陽光の下にその姿をさらしだした。

宇宙船から出てきたのは、紛れも無く人間だった。少なくとも、見た目はそうだ。

その人物はゆったりと歩いて高尾達の前に来ると、保護者を指差し、こう言った。

「A 17、そこにひざまずけ」

宇宙船から出てきた人物の命令に従い、保護者が膝をたれる。

高尾の命令を聞かなかった保護者とその人物の命令には従った事実、高尾は気がつかなかった。

宇宙船から出てきた人物の意外な容姿に混乱して、そんな事にまで頭が回らなかったのだ。

「ケイ……?」

高尾が呟く。宇宙船から出てきた人物は、ケイにそっくりだった

のだ。

ただし、一つだけ大きな違いはあったのだが……

「確かに私の名前はケイナだが、あなたと私は会ったことが無いはずだぞ、高尾・フレサンジ・三太。

いや、君が言いたい事はわかる。君の事は調査したからな。

君は私が君の親友である浅羽・袴田・慶太郎にそっくりだと言いたいのだろ？

確かに私は君の親友にそっくりだ。

だが一つだけ大きな違いがある。

それに気づかないような君ではないはずだが」

確かにその通りだった。

ケイナと名乗った人物は、容姿こそケイにそっくりだが、声も、

口調も、身長も違う。

それにもまして違う部分は……

高尾の視線がケイナの胸元に注がれる。

ケイナの胸元は膨らんでいた。

「そう、私は女だ」

ケイナが宣言をする。

容姿が同じ二人の人物。

その一番の違いは性別だった。

それでも、ケイと同じ顔を持つケイナがケイと違う事が信じられなくて、高尾はじろじろとケイナの顔を眺めた。

すると、ケイナの頬に微かに朱が混じった。

「あまりじろじろ見てくれるな。恥ずかしいではないか」

高尾は驚いて思わず仰け反った。

ケイと同じ顔の人物からそんな言葉が出てくるとは思わなかったのだ。

「まあよい。それよりも危ないところであつたな」

コホンと咳払いをして、ケイナは元の調子で高尾に話しかけてきた。

「危ないところって……？」

言われた事の意味がわからず、高尾は首を傾げる。

「何を言っている……いや、そうか。まだ理解していないのだな」

すると、ケイナはなぜかニヤニヤと笑いながら高尾の顔を覗き込んできた。

「何が言いたいんだ？」

今まで会った事の無い種類の人物の言葉に、高尾は辟易しながらもそう聞いた。

「簡単な事だ。君はもう少しで死ぬところだったのだよ。私ができるのがもう少し遅ければ君は死んでいただろう。」

私達とは違い、君達に危害を加えてはならないという命令はナノロイドにプログラムされていないからな」

その言葉は高尾にとってまさに馬耳東風というものであった。

とはいっても軽んじて聞き流したわけではない。

その内容が衝撃的過ぎて、鼓膜の振動が意味する事を脳に伝える事を拒否したのだ。

それを認めてしまえば命までかけて勝ち取った自分の価値観が崩壊してしまうから、脳がその言葉の意味を理解する事を拒否したのだ。

「ちなみにナノロイドとは君達で言うところの保護者の事だ。」

微細な機械でできた人間。ナノマシン・ロイド。つまりナノロイドだ……って聞いているのか、君は」

「……………え？」

高尾は我に返ったようにケイナの言葉に反応した。

そんな高尾の姿を見て、ケイナは困ったように髪を梳き上げる。

「……………認めたくないのは分かるが、真実こそが君の求めているもの

ではなかったのかね、高尾・フレサンジ・三太」

その言葉に高尾ははっとする思いだった。

そう、真実こそが自分が求めていた事なのだ。

リターナの秘密を知った後も恐れこそすれども継続して八子の観察を続け、保護者に八子を引き渡す事も無く、保護者に八子を回収されまいとしたのは、全ては八子が動く事によって、保護者が隠している真実の全てが明らかになるのではないかと思っただからだ。

「いい目をするようになったな。では、君が望む真実というものを語って聞かせよう。今日はそのために来たのだからな」

ケイナが高尾に微笑みかける。高尾は、その言葉を聞いて疑問が生じた。

「僕に真実を聞かせに来た？」

「その通りだが、何か問題があるのかな？」

問題は無い。だが、疑問はある。

「なぜ、僕にそんな事をするんだ？ 他の誰でもなく、僕に」

高尾が疑問を投げかけると、ケイナはにやりと口元を歪めた。

「それは、私が君に感謝しているからだ。君は実にいい仕事をしてくれたからな」



ケイナが答える。その答えは、高尾に新たな疑問を生じさせた。

「仕事？」

「そう、仕事だ。」

君は八手を他の人間に興味を持ち、意思の疎通ができるまでに成長させてくれた。

これは立派な仕事だ。

私達が君たち亜人間を治療し、人間として新たに生まれ変わらせたものの、未だ人たりえなかつたものを、君は見事に人間に成長させてくれたのだ。

そしてその事により私は賭けに勝ち、ナノロイドの専横を処断する事ができる」

最後の方は、高尾の耳に届いてはいなかった。

その話の内容は、高尾に衝撃を与えるのに十分な内容だった。

「……リターナが純粋な人間だとしたら、あの肉体的な能力はどういう事なんだ」

あまりに衝撃的な内容に朦朧とした高尾は、それでもかろうじて質問を返す。

「それはまあ、簡単に死なれては困るから、私達と同じ能力を付けはしたが……君が望む真実とは、そんな細かい事ではないだろ？」

ケイナの口元が意地悪くにやける。

「まあ、とにかく聞くがいい。私はあくまで真実を君に伝えるだけ

だ。

それを聞き、君がどういう行動を取るかは君の自由なのだからな」

そしてケイナは真実を語りだした。

## ケイナの話（前書き）

この話の中に出てくる「アンシブル」はオースン・スコット・カ  
ード著の「エンダーのゲーム」に出てくる機械です。

簡単に言えばどれだけ離れていても瞬時に連絡がとれる機械です。  
まあこの世界でのそういった機械の発明者がこの小説の愛読者だ  
ったとお考えください。

ちなみに各部の冒頭の台詞だけの節も「エンダーのゲーム」のバ  
クリだったり。

非常にお勧めの作品です。途中から翻訳されてないので原文で読  
むしかありませんが……

## ケイナの話

まず、私の事からはつきりさせておくべきだな。

私の名前は啓那。この星から八百年前に宇宙に旅立った者達の生き残りだ。

ふむ。生き残りという言葉が気にかかっているようだが、別にそれは言葉の綾でもなんでもないぞ。

私は今年で八百二十六歳になる。

驚いているようだがまあ無理も無い。

君は知らないだろうが、延命装置は開発されていてね、細胞を若返らせる事によりこの姿を保っているのだ。

ともかく、今回の騒動は私が里帰りを思い立ったところから始まった。

私は八年前、地球がそろそろ浄化されている頃だというのを思い出して、地球の衛星から送られてくるその当時の地球のデータを見てみたのだ。

そうしたら驚いたよ。

君達のような不完全な人間が地球には暮らしているのだからな。

まあ、ナノロイドが何を考えてこんな事をしたのかは見当がつく。

それはナノロイドが君達に説明しているように人間がいないと存在意義がなくなるからなのだろう。

それで人類を再生したのはまだ分かるし、まだ許せる。

全ては主のいないこの星にナノロイドを放置した私の責任なのだからな。

だが、私にはナノロイドの行った行為の中に、許す事ができない事実を見つけた。

私が許せないナノロイドが行った行為とは、ナノロイドが自分の都合よく家畜のように人間を改良していた事なのだ。

現存する四十の管理区を調べてみてそれははっきりした。

第一番から第二十番までの管理区は全滅していたが、これもなぜ全滅したのかは予想がつく。

まず、ナノロイドは人類を再生するにあたり、繁殖力を除去した。

これは勝手に増えられてしまったては管理が大変だからだろう。

これにより君達の性は三つに分けられた。

しかし、これは上手くいかなかった。

これは第一番から第二十番までの管理区が全滅していた事からの推測だが、恐らく、第一番から第二十番管理区までの住人は繁殖本

能を妨げられ、結果として暴力本能を解放し、戦争に明け暮れたたのだろう。

その結果として、第一番から第二十番管理区までの人間は全滅してしまった。

そのため、次にナノロイドは人間の暴力的な本能を抑制した。

これは戦争により絶滅しないための処理だろう。

しかし、これも上手くいかなかった。

確かに戦争が起きる事はなくなったが、やはり繁殖能力を妨げられた結果として、嫉妬から一時的に暴力的な本能が増幅し、女性が中性を殺し、男性が女性を殺し、最後には男性しか残らないようになったのだ。

そのため、次にナノロイドは人間の暴力的な本能を、防衛本能だけを残して完全に除去した。

そうすれば殺人は起きないからな。

しかし、やはりこれも上手くいかなかった。

暴力的な本能を完全に除去した結果、殺人こそ起きないようになつたが、その代わり嫉妬心を発散する事もできなくなり、世を憐む者が増え、結果として自殺者が急増したのだ。

この症例が起こっている管理区は未だ存在するが、その状況は酷いものだ。

最後にナノロイドは嫉妬心などの感情の一部を除去した。それが君達の世代だ。

これは一見成功したかのようにも見えた。

争いも無く、世を憐む者もなく、平和そのものだ。

しかし、それもやはり失敗だったのだ。

ここまで人間をいじくった結果、ナノロイドは君達を人間とは認識できなくなってしまうたのだよ。

どうやら君達のような存在を創り出してしまった事でナノロイドも自分の失敗に気がついたようだ。

それ以後は人間は生産されなくなった。

しかし、ナノロイドはただ人間を生産しなくなっただけで、すでに生産した人間を治すでもなく滅ぶに任せて捨て置いている。

これは、私には放っておく事のできぬ問題だった。

言い忘れていたが、私はナノロイドの産みの親でな。私には自分の創ったものが起こした不祥事の責任を取る義務があるのだ。

ゆえに私はこの事実を知るとすぐに地球へと旅立った。

地球にはまだ、門を抜けて遙か遠き理想郷へ移り住んでいた弟がいたのでアンシブルを使い連絡を取り、私はすぐにこの地球へと旅

立った。

だが、アンシブルにより情報の伝達は瞬時に行えるものの、物質の瞬間移動は未だ開発途上でな、地球に着くのに実時間で七年もかかってしまった。

私は地球に着くと、地球に来るまでの間に考えていた計画を立て、準備を終わらせておいた事をすぐに実行に移そうとした。

計画とは地球に遺伝子治療のプログラムをしたナノマシンをばら撒いて亜人間を治療するものだ。これが一番手っ取り早いからな。

しかし、その計画は連絡を取ってきた弟によって止められた。

弟の話によると、弟は私の連絡を受けてから八年の間、君達の中に潜り込んで一緒に生活をして、君達を調査していたらしいのだ。

そうやって君達と一緒に暮らしてみた結果、弟はその計画を実行に移すべきではないと判断した。

確かに地球の状況はひどいものだが、一ヶ所だけ例外があったからだ。

それは、君達の管理区だ。

君達の管理区は平和そのものだ。

君達は身体をいいようにいじられた結果、人間とは認識されない存在になってしまったが、それは一代限りの新たな種が生まれたと言っても良い。



それが安定しているとすれば、一個人の勝手でその種の存在を否定するような真似をすべきではないと弟は考えたのだ。

弟の意見は私にも理解する事ができた。

しかし私はナノロイドの愚行を許す気にはならなかった。

だから私は弟と賭けをする事にしたのだ。

弟が賭けに勝てば現状を留め、私が勝てば私の計画を実行すると。

ただし、計画の対象は地球上の亜人間全てではなく、人間へと生まれ変わる事を希望した者だけに変更したが。

賭けの内容はこうだ。

まず、被験者を選び出し、その者の記憶を消去して完全な人間へと治療し、君達の管理区に帰還させる。

帰還したものが君達の手により人間として生まれ変わり、集団として生きていく気配を見せれば私の勝ち。

そうでなかったら弟の勝ちだ。

これはつまり、君達と人間が共存できるかを調べるテストというわけだ。

ちなみに賭けの期間は十年を予定していた。

君達がリターナと呼び、私達が帰還者と呼ぶ者の選出基準は、自殺を思い立った者達だ。

私は自殺を決行する寸前の者を回収し、本人の希望を聞いた上で、記憶を失い、自力で動ける事すら忘れるが、しかし完全な人間へと生まれ変わらせた。

また、放置した帰還者はそのままと死んでしまっただろうから、私達のように宇宙で暮らす者達が身につけている能力を身につけてもらっている。

それは非生存環境における肉体硬化能力とテレパシー能力だ。

本来は宇宙空間に放り出されてしまった時などに救助を呼び、救助が来るまで生き延びるための能力だが、これは長らく地表に捨て置かれるだろう帰還者の身を守るために、また、人間として目覚めた時に未だ人間として目覚めていない者を目覚めさせるのにちょうど良いものだった。

帰還者を君達の管理区に放置したのは、君達の性質を計るためだ。

君達は亜人間であり、私の治療を拒否した場合、異なる種のものとして共存する事になる。

ゆえにもし、君達が帰還者を人間として育てあげ、共に暮らすことができたのならば、異なる種のものとして暮らす事に問題はないと考えられるからだ。

そして君は八子を育て上げ、人間として生まれ変わらせてくれた。

これにより、私の勝ちほぼ不動のものとなった。

今日は君に話を聞かせに来たのもあるが、同時に今日、私がここに現れたのは、ナノロイドの横暴をこれ以上野放しにしないためでもある。

これまでも帰還者が人間に生まれ変わりそうになった事は何度かあるのだが、そのたびに帰還者はナノロイドによって回収され、監禁されているのだ。

これまでの帰還者はまだ人間とも獣ともいえない段階で回収されていたから私も許していた。

だが、八チは違う。

八チは自我を獲得し、一人の人間として、一人の男として行動を始めた。

ゆえに私はもはやナノロイドに彼を傷つけることを許さない。

回収された帰還者達はナノロイドの拠点地に監禁されている。

この話を聞いて八チが仲間を助けに行くかどうかは八チの考え次第であり、私には強制できないが、私は八チが仲間を必ず助けに行くものと確信している。

そして、八チが仲間を救出し、心を通わせ合えば、賭けは私の勝ちとなる。

八チが仲間を救出した後で、私は地球上にいる全亜人間に希望を

募る。

それまでによく考えておくのだな。自分の道を。

この話を聞いた上で君がどう判断し、どう行動するかは君の自由だ。

しかし、できる事なら君には私の治療を受けてもらいたいと私は考えているのだがな。

#### 第四部 亜人間（前書き）

お出かけするのでさっさと投稿。

しばらく高尾が苦悩するだけの話が続きます。

苦悩してるので同じ考えが出てきたり支離滅裂だったりと非常に小説向けじゃありません。

・小話

ちなみにキャラクターの名前の付け方は

高尾・フレサンジ・三太⇨サンタクロース

クリステイナー・リンドール・ラッセン⇨クリスマス

浅羽・袴田・慶太郎⇨ケーキ

とこの三人は12月に思いついた話だったからという由来で

ナナ⇨うちの猫（18才の女の子）の名前（拾った日が11月7日）  
ハチ⇨ヒロイン役が7ならヒーロー役は8でいいんじゃない？

とものすごく適当に考えてつけました。

作者のペンネームも如月由縁（2月生まれだから）と名前の付け方は適当です。

## 第四部 亜人間

「三太少年に会って来たよ。彼は実に良い。

……どうした？ 落ち込んでるようだが」

「……聞かなくてもあなたには分かっているはずだ」

「もちろん分かっている。

分かっているが、しかし先に君に注意されたからその忠告に従って  
みたのだよ。

君は三太少年が苦しんでいる様子を見るのがつらいのだな。

しかし、分かっているとは思いが、君はもう彼に会う事はできない。  
慰める事はできないのだよ。

それでは賭けが公平ではなくなるからな」

「分かっているよ」

「まあ、彼が私の治療を受け入れるというのなら、会う機会もある  
だろうし、彼を君の世界に誘う事もできるだろう。

私としては彼に治療を受け入れて欲しいものだ。

彼は実に私好みだ。

彼が治療を受け入れたら、彼を私の世界に誘っても良いものかな？」

「……高尾は治療を受け入れない」

「そうか……まあ、彼を身近で見てきた君が言うのだから間違いな  
いのだろうが、まだ、確定したわけではない。

ひょっとしたらがあるのではないか？」

「それは、僕だって高尾に治療を受けて欲しいさ。

そうすれば、あなたが彼に話さなかったあの事に高尾が巻き込まれる事は無いんだから！」

……けど、高尾は治療を受け入れない。

多分、その先にある事を知ったとしても受け入れないんだろう……」

## 高尾の苦悩・その一

ケイナの話聞いた後、僕と八子は自宅に帰った。

家の中にナナの姿が見当たらないのが気になったが、今の僕は探しに行く気にもならなかった。

それに、ケイナの話聞く限りでは、ナナもまた八子からのテレパシーで自我を得て、人間として生まれようとしているらしい。

それならば、ナナはもはや一人の個人というわけだ。

ナナがどこに行こうと僕が口を出す事ではないだろう。

僕は椅子に座り、読みかけで開いたまま机の上に置いてあった本を閉じた。

こんな状況では本を読むどころではない。

頭が混乱して、何から考えていいのかすら整理する事ができない。

それは八子も同じ事で、八子は家に帰ってきてからずっと突っ立って遠くの方に視線を泳がしている。

僕は椅子にふんぞり返り、目を閉じた。いつもなら目を閉じれば気分が落ち着き、物事を整理して考える事ができる。

けれども今は、目を閉じても意識は混沌としていて、自分が何を考えているかすら分からない。



頭に負荷がかかり過ぎているのは自分でもわかった。

こんな時は寝てしまふのが一番良い。

寝れば脳が記憶を整理してくれる。

けど、神経が興奮して寝る事などできそうに無い。

こんな時に考え事するのは百害あって一利も無い。

けれども、僕の意識は混沌の中から今日、聞いた事を拾い上げ、あまり意味の無い事ばかり考えてしまっていた。

例えばケイナはケイとそっくりだったけれども、ケイが女になったらあんな感じになるのかなとか、ハチは元々どこかの管理区の間だったらしいけど、元はどんな性格をしていたのかなとか、帰還者と機関車は発音が同じだなとか……

そんな意味の無い思考ばかりだったけれども、それでもずっと考えていたら、一つや二つは意味のある思考が浮かんできた。

例えばケイナの呼びかけにどれくらいの人が賛同するだろうとか、ケイナが僕を治療したら、僕はどんな人間になるのだろうとか。

ケイナが話した他の管理区の状態を聞いた限りでは、ケイナの呼びかけにはほとんどの人が応えるだろう。

他の管理区は絶望に包まれている。

もし、その現状が改善できるといふのなら、ほとんどの人は喜んでケイナの提案を受け入れるだろう。

けど、少なくとも僕は別だ。

ケイナに治療された後の僕の姿なんて、想像するのも恐ろしい。

ケイナに治療されれば、僕は怒りを覚えるようになるだろう。

憎しみを覚えるようになるだろう。

嫉妬を覚える事になるのだろう。

今まで感じた事も、感じる事もできない感情だけれども、話を聞く限りでは、それは破滅を招く感情だ。

破滅の感情に心を支配され、他人を傷つける自分の姿など、想像すらしたくない。

過去の記録を見る限り、確かにそれらの感情は人間の発展を支えてきたみたいだけれども、けど、この世界にはそんな感情は必要ないのだ。

この世界は完成されている。

ここでは争う必要も無いし、性の関係も全員が諦める事によって解消されている。

だからそんな感情は必要ないのだ。

でも、同時にそんな感情を抱いてみたいとも思う。

未知の感情を感じる事は、それが負の方向を向いていようと、良い意味でも悪い意味でも自分を変え、新しい道を指し示す。

それに、性が三つから二つに戻れば、僕はクリスの思いに応える事ができて、クリスと一緒により幸福な人生を送れるかもしれない。

けど、逆にそれが怖い。

性が二つに戻ってしまえば、僕のこのケイへの気持ちはどうなってしまうのだろうか？

ケイナに治療された後、ケイを見た時にこの思いが消えていたらと思うと怖くてたまらないのだ。

この気持ちが自然に消えてしまうのならそれでもいいかもしれない。

けど、人の手によってこの思いが消されてしまうのなら、それはとても恐ろしい事を感じるのだ。

結果としては同じだ。

過程には意味が無いかもしれない。

けど、この過程の差になぜか僕は抵抗を感じるのだ。

様々な思いが僕を悩ませ、苦しめる。

苦悩の果てに僕は疲れ果て、いつのまにかに眠りに落ちていた。

## 高尾の苦悩・その二

今日、クリスとナナが帰ってきた。旅に出ていたらしい。

ちょうどいいから八チとナナを預かってもらおう事にした。

二人がいると二人の事が気になって考えに集中できないのだ。

クリスは僕と話したがっていたけれども、僕はクリスと話せるような状態じゃなかった。

それに、クリスと話していたら、ついつっかりとケイナの話をしてしまうかもしれない。

クリスにはこんな話、聞かせたくない。

どうせ後々聞く事になるのだからうけれども、卑怯と思われようが誰になんと言われようが、僕の口からはクリスに聞かせたくないのだ。

クリスが八チとナナを連れて帰った後、僕は椅子に座って思考を再開した。

まずはじめに浮かんだ事は、クリスは治療を受けるのだろうかという事だった。

クリス達女性は男性や中性に比べて治療を受ける事により変わる部分が一つ少ない。

性と性の嗜好を変えられたのは男性と中性だけだ。それが無い分、迷いは少ないだろう。

クリスは治療を受けるだろうか？

それを考えても答えは出てこなかった。

多分、クリス本人に聞いたなら『どっちでも良い』とか『サンタがするならクリスもする』とかそんな答えが返ってくるだけだろう。

女性が治療を受ける利点は少ない。

女性が治療を受けるとしたら、それは新しい感情を感じてみたいという欲求が新しい感情を感じる恐怖に打ち勝った場合だろう。

ケイはどうだろう？ ケイは治療を受けるだろうか。

多分、ケイは治療を受けないだろう。

というよりも、中性の大半は治療を受けない気がする。

中性はそれだけで完成されている。

中性は繁殖本能こそ押さえられているものの、その分だけ悩みは少ない。

それに負の感情を押さえられているから、穏やかで楽しい、満ち足りた生活を送っているはずだ。

治療を受けるとしたら、それはやはり、新しい感情を感じてみた

いという欲求が新しい感情を感じる恐怖に打ち勝った者のみだろう。  
そうになると、問題なのは男性だけのようだ。

男性は治療を受けるメリットは大きいが、デメリットもまた大きいのだ。

メリットとは女性を愛せるようになる事だ。

女性を愛せるようになれば満たされない心を満たす事ができるようになるかもしれないのだ。

絶対に振り向いてもらえない対象に対する思いを忘れられ、振り向いてもらえる対象ができるならば、男性は喜んで治療を受けるだろう。

デメリットは、そのままメリットの逆となる。

女性を愛するようになれば、中性に対する思いは消えてしまっだろう。

もしかすると変わらないのかもしれないが、その可能性は低いと思っ。

この前も考えた事だが、僕はこの事に抵抗を覚えている。

デメリットはもう一つある。

それは負の感情が蘇る事だ。

暴力本能が蘇れば、争いがこの地球上を覆い尽くすだろう。

それは第一番から第二十番管理区の住人が全滅している事からも想像がつく。

暴力本能は、けれども文明の発展には不可欠な要因だ。

暴力本能を良い方向に向けて保護者達と協力して文明を復興すれば、ケイナのように宇宙にすら旅立てるだろう。

けど、この前も考えたが、僕はこの世界にそんな感情はいらな  
いと思っ  
ている。

ここまで考えた時点で、男性が治療を受ける確率が高いと僕は考  
えている。

他の管理区の住人は叶わぬ思いに絶望し、自殺者まで出ているの  
だから、それが解消されるとなれば躊躇はしないだろう。

ただし、完成されているこの管理区の住人だけは別だが。

逆に、この管理区の住人はほとんどが治療を受けないと思われる。

それは僕が今まで考えてきたように、メリットよりもデメリット  
の方が大きいからだ。

僕たちの管理区は、感情的な問題も性的な問題も解決している。

ゆえに他の管理区で起きているような問題は無く、治療を受けれ  
ば失うものの方が大きいのだ。



……けれども、治療は受けるべきなのかもしれない。

さもないと、この管理区の人間は地球上で孤立してしまうのだ。

他の管理区の人間は、治療前でも一応は人間として認められているらしいが、この管理区の住人は人間として認められてないという。

ならば僕達は、治療を受けなければ本当に人間とは違う種として孤立する事になる。

治療を受けるべきか、それとも受けないべきか……僕には決められない。

これは僕の問題だが、僕には決められない。

誰か、相談する相手が欲しい。人と話せば自分の気持ちが整理できるはずだ。

クリスには話せないし、ハチやナナは論外だ。

となると、こんな事を相談できる相手といたら、ケイしかないだろう。

僕はケイに相談しに行く事にした。

家を出て町を歩き、ケイの家の前に立って玄関を叩く。

けれども、ケイの家の中からは何の反応も無かった。

ケイは出かけていた。

### 高尾の苦悩・その三

今日もケイの家に行ってみたが、やはり留守だった。

こんな時だというのに、ケイはどこに行ってしまったのだろうか。

僕はいつものように椅子に寄りかかり、思考を巡らせる。

けれども思考は行き詰まり、まともな結論は出てこなかった。

僕が思考の迷路をさ迷っていると、玄関が叩かれた。

もしかしてケイが帰って来ていて、この家を訪ねて来たのだろうか？

僕は大急ぎで玄関に向かい、玄関を開けた。

けれども、そこには僕の望む人影は存在していなかった。

そこにいたのは銀の鎧を着て右頬にA 17と書かれた男  
この前の八手を回収しに来た保護者だった。

「少し話がしたいのですが」

僕を見るなり保護者はそう言うてきた。

僕は保護者の姿をあまり見たくは無かった。

正直なところ、今の僕は保護者に対して不審を抱いている。

全ては保護者から始まったのだ。

保護者が僕達を製造し、その過程で改良したからこそ、僕は今、こんなに悩み、苦しむ事になっているのだ。

それに、保護者は僕達を人間として認識できないらしい。

それはつまり、保護者は僕の命令を聞かないし、僕に危害を加える事もできるという事だ。

そう考えると、保護者に対して僕はあまり好意的にはなれない。

けど、今は誰でもいいから話がしたい気分だった。

だから僕は保護者を自分の家の中に招いた。お互いに椅子に座り、机を挟んで向き合う。

「治療を受けて下さい」

意外な事に、保護者の口から出た最初の一言はそんな言葉だった。

これは、どういう事なのだろうか？

保護者は僕達が治療受けると管理しにくくなるから、だからハチを回収しようとしていたのではないのか。

……いや、そもそも前提がおかしい。

保護者達はケイナの賭けの事を知っていたのだろうか？

ケイナが保護者達にそんな事を話すはずが無い。

だとしたら、どうして保護者達は育ちかけのリターナ達を回収していたのだろうか？

「……その話の前に一つ聞いていいかな」

「はい、何でしょうか？」

「保護者達は、ケイナの賭けの事を知っていたの？」

「はい、知っていました。彼女の弟が我々に教えて下さいました」

なるほど、と僕は納得した。

ケイナの弟は僕達がリターナを育てない事に賭けていた。

それにケイナの弟はこの管理区に住んでいるという。

恐らく、育ちかけのリターナを探し出して、その情報を保護者達にリークして回収させていたのだろう。

話のつじつまはあった。だからこそ保護者はリターナを育てるなというお願いをしたのだろうし、僕達がリターナを育てているのを発見したら回収していたのだろう。

けど、それなら疑問は原点に戻る、どうして保護者は今頃になって治療を受けるなんていいに来たのだろうか？

治療を受けない方が管理しやすいはずなのに。

「それで、どうして僕に治療を受けて欲しいのかな？」

「それは、この管理区の住人だけがほとんど治療を受けないと思われるからです」

どうやら保護者の側でも僕と同じ結論にたどり着いたらしい。

しかし、それで保護者にどんな不都合が生じるというのだろうか？

「けど、その方が保護者には都合がいいんじゃないのかな」

「それは違います。」

この管理区の住人が治療を受けないという事は、我々にはもう、この管理区の住人を守れなくなるという事なのです」

その言葉の意味は良く分からなかった。

確かに僕達が人間ではない以上、保護者達は治療を受けた人間の味方につかなくてはならない。

けれども、守るとはどういう事なのだろうか？

「あなたは、人間の凶暴性というものを知らないのです」

疑問が顔に出ていたのだろうか。保護者はそんな事を言ってきた。

「我々が人間を再生させたのは今回が初めてではないのです。」

三百年前にも一度、人間を再生させたのです。

我々が改良を加えなかった人間は我々に兵器を生産させ、わずか二十年も経たないうちに滅びてしまったのです」

……保護者の衝撃的な告白に、僕は思考が止まってしまった。

その間にも保護者の告白が続く。

「我々が人間を改良して再生させたのはそのためです。人間の凶暴性は性に大きく関わっています。

これを解決するためには性を一つに統合してしまうのが一番合理的でしたが、それでは人間ではなくなってしまうために我々は変わりに性を三つに分けました。

しかしそれでも人間の暴力性は抑えられる事が無く、仕方なく我々は人間から感情を削っていったのです。

後は、あなたも知つての通りです」

僕は、ただでさえ疲れ果てている頭でそんな事を聞かせられたから、頭が朦朧としてしまった。

そんな僕に止めを刺すように、保護者が絶望的な事実を指摘する。

「人間が正常な状態に戻れば、必ずやこの管理区の住人は彼等によつて襲われるでしょう」

……それは、気がついてはいたけれども、あえて考えなかった事実だった。

「人間は異質な存在を怖がります。

あなた方が人間とは違う存在だという事はいつか彼等にばれるでしょう。」

そうなった時、彼等はあなた方を恐れ、不条理にも憎しみすら感じようになるでしょう。

また、治療を受けないとなると、あなた方の存在は過去の自分を思い返させる事になる。

それがまた彼等の恐怖や憎しみを増大させて、あなた方を襲う大義として扱われる事になるでしょう」

僕は、何も言えなかった。それはあえて考えないようにしていた事だけでも、僕が考えたとしても同じ結論に至っていただろう。

保護者の言葉に、僕は何も反論する事ができなかった。

「どうやらあなたは理解したらしい。

それならば私が話す事はもう無いでしょう。

どうか治療を受けて下さい。

それが我々の望みなのです。

……そろそろ自分に行かなくてはなりません。

自分は、この事をこの管理区の住人に話して回らなければならないのです」

どうやら話は終わりらしい。保護者は立ち上がった。

けど、僕は最後に一つだけ保護者に聞きたい事があった。

「どうして保護者はそんな事をするんだ？

僕達は人間ではない。

保護する必要も、そんな事を説いて回る必要も無いじゃないか」

それを聞くと、保護者は穏やかに微笑んだ。



「あの時、彼女は彼女が現れなかったら自分があなたを殺しただろうと言ったのを覚えていますか？」

それは覚えている。僕の世界が滅んだ瞬間の事だ。

忘れられるわけが無い。

例えその時は言葉が認識できなくとも、不思議な事に記憶は残っていて、ここ数日の間に思い出した。

今の僕はしっかりとその事を覚えている。

僕が頷くと、保護者はゆっくりと首を横に振ってこう答えた。

「それは間違っているのです。

もし、彼女が現れなくても自分はあの時、攻撃を止めていたでしょう」

意外な保護者の言葉は、しかしその穏やかな保護者の顔を見ていると不思議に納得ができた。

「我々はあなた方を人間として認識できなかった。

だからこそ、あなた方を育てている間に我々はあなた方に愛着を抱くようになったのです。

我々が生み出し、我々が育てた存在。

そんな存在に、いつのころから我々は義務からではなく、心からあなた方の保護者になりたいと思うようになっていたのです。

つまりは保護者という肩書きからではなく、保護者という言葉そのままの意味として。

我々はプログラムされている事からそう感じるようになりました。

ですが、人間の感情も我々のプログラムと同じようなものです。  
そこに違いはないと我々は考えています。

この我々の心が嘘ではないと信じたいし、嘘にしたくは無い。  
だからこそ、我々はあなた方を守るために動いているのです」

## 高尾の苦悩・その四

保護者が帰った後、僕は一昼夜かけて悩み続けていた。

僕は治療を受けるべきなのだろうか？ それとも受けないべきなのだろうか？

いくら考えても答えは出てこない。

治療を受けなければ、僕は殺される事になるだろう。

けれども、治療を受けなければこれ以上、余計な感情に惑わされる心配はない。

暴力的な本能に心を支配され、人を傷つける事になるかもしれないなんて、考えずに済むのだ。

治療を受ければ僕が死ぬ事は無いだろう。

意外にも平穏で、満ち足りた人生が送れるようになるかもしれない。

けれども、治療を受ければ僕の中からいくつかのものが失われる事になる。

僕はこれまで生きてきた十四年間の人生を否定したくは無いのだ。

僕は悩み、苦しんでいた。一見、保護者の言葉は救いの言葉にも見えた。

迷う事は無い。

治療を受けてしまえと。

治療を受ければ全てが上手くいく。治療を受けずに死を選ぶなんて意味が無い。

迷う必要などはないのだと。

でも、保護者は口にくそ出さなかったものの、間接的にこうも伝えていたのだ。

つまり、治療を受ければ、もうそれは自分ではなくなるのだと。

僕達は、どうやら亜人間という種族に属するらしい。

治療を受ければ僕らは亜人間ではなくなり、違う種である人間になるのだ。

僕には決められなかった。決められるはずが無かった。

それはそうだ。偽りの生か、真実の死かなんて、決められるわけが無いじゃないか！

僕は悩み、苦しんでいた。

そんな僕の前にクリスは現れた。

クリスが家の中に入ってきた事に、僕は気がつかなかった。

クリスはいつも玄関を叩かずに入ってくるけれども、どたばたと玄関を乱暴に開けて入ってくるから、音を立てずにこの家に入ってきた事なんて無いのだ。

けど、今日のクリスはいつもと様子が違っていた。静かに玄関を開けて、僕が気づくまでの間、ずっと僕の前に立っていたのだろう。だから僕はふと視線を上げてそこを見るまで、クリスがそこに立っていた事に気がつかなかった。

クリスは暗い顔をしていた。

恐らく保護者の話を聞いてしまったのだろう。

クリスは跪いて椅子に座っている僕の膝の上に上半身を預けてきた。

甘えてくるクリスを僕はいつも邪険に扱ってきたが、でも、今の震えるクリスの身体を足に感じると、今はそんな事はできなかった。

「サンタは治療を受けるの？」

僕はクリスの言葉に答える事ができなかった。

「クリスはどうなの？」

だから、代わりに質問を返して言葉を濁した。

「サンタが受けるならクリスも受ける」

予想通りの答え。

その答えが僕をつらくする事にクリスは気がついていないのだろうか。

僕が治療を受ければクリスも治療を受けて二人とも死ぬ事は無い。

けれども、僕が治療を受けなければ僕はクリスを道連れにする事になる。

つまり、クリスのその答えは、僕の答えは僕だけではなく、クリスの運命さえも決めてしまう事になるのだ。

けど、クリスのその言葉もわからない事は無い。

僕もケイがいて、ケイがどちらにするかを決めたのならば、それに従っただろう。

だからこそケイに相談したかったのだけれども、ケイはどこかに消えてしまった。

クリスは僕を愛しているのだろう。

僕はケイを愛している。

愛している人と同じ道を進みたいというのは、多分、自然な欲求なんだと思う。

けど、僕が自分の運命を預けられる人間は消えてしまった。

僕は自分自身で答えを出さなくてはならないのだ。

自分だけではなく、もう一人の運命をも抱えたその問いかけに、僕は一人では答えを出せなそうにもなかった。

そんな時、ふと思いついた事があった。

「クリス、キスをしよう」

僕はクリスにそう言った。

僕は、クリスにも答えを出す事を手伝ってもらおうと思いついたのだ。

僕には一人で答えを決められない。

だから、クリスにも答えを出す事を手伝ってもらおうと思ったのだ。

「キスって？」

「キスって言うのは、唇と唇を合わせる行為の事だよ。これは愛を確かめ合う儀式なんだ」

それを聞いて、クリスは驚いたけれども嬉しそうだった。

罪悪感が胸を締め付ける。

僕はクリスの事が好きでも、クリスを愛してはいない。

クリスには愛を確かめ合う儀式でも、僕にはこれは検査なのだ。

自分の心を知るための検査なのだ。

クリスが目を閉じて顔を近づけてくる。

僕も、クリスのそれに動きをあわせた。

僕はクリスとキスをした。

キスをして、クリスは幸せそうだった。

けれども、僕は何も感じなかった。

唇を合わせても、何も感じなかった。

これが僕の現実。そう、現実なのだ。

涙が出そうだった。

けど、必死で我慢した。

クリスを愛せない事はつらい。

でも、それが僕なのだ。

答えは出てしまった。

僕は、そのままの自分を失いたくは無い。



例え死ぬ事になっても、違うものにまでなって生きていく自分を許す事はできない。

「クリス。僕は治療を受けない」

僕は、努めて穏やかな顔でクリスに僕の答えを話した。

「……じゃあ、クリスも治療を受けない」

クリスは僕の膝の上に腰を下ろして、僕の胸に顔をうずめながらそう答えた。

クリスは震えていた。

クリスの震える身体を僕は抱きしめた。

僕は、クリスの命を奪ってしまった。

僕のわがままでクリスを死なせる事になってしまったのだ。

僕は罪を負った。

その罪を贖う事はできそうにもない。

だから、せめて僕に生がある限り、僕はクリスを愛していこうと思っただ。

愛する努力をしようと思っただ。

それができなくても、せめて愛する演技をしようと思った。

クリスが幸せでいられるように願った。

クリスに幸せでいて欲しかった。

それが、僕の罪であり、贖罪なのだから。

## 高尾の苦悩・その五

その日からクリスは僕の家引っ越してきた。

時間が無いならば、せめていつも僕と一緒にいたいのだとクリスが言ってきたのだ。

僕に異存は無かった。

クリスを愛する事こそが僕の今からの人生の目標なのだ。

それならば、いつも一緒にいた方が都合が良い。

その次の日に、八子とナナは僕の家を訪ねてきた。八子も答えを出したようだった。

「行ってくる」

八子はそれだけを僕に告げた。

それを聞いた時、ふと僕の頭によぎった事があった。

もしかして、ここで八子を止めればそれだけで僕がここ数日間、悩んでいた事が解決されるのかもしれない。

僕が八子にお願いすれば、八子は決意を翻すかもしれない。

そうすれば、またあの僕と八子とクリスとナナとケイの、あの五人の平和な生活に戻るのだ。

「……気をつけて行ってきな」

けど、僕はそれを口にしなかった。

ハチは頷いて僕に背を向けた。

ハチとナナが出かけていく後ろ姿を眺めていて、ようやく僕の中から苦しみが薄れていった。

これで、全ての問題に決着が着いたのだ。

それは良い事ばかりではないけれども、むしろ悪い事の方が多いけれども、それでも、僕は自分で答えを出したのだ。

自分の人生を自分で決めたのだ。

これから、その答えに対する結果が僕の身に襲いかかるだろう。

それは恐ろしいことだ、でも、覚悟の上の事だ。

もはや、僕には悩み苦しむ事など何も無い。

僕の苦悩は消え去ったのだ。

## 第五部 人間

「三太少年が答えを決めたよ。」

この賭けに関しては君の勝ちだな……まあ、嬉しくも無いだろうが」

「そう……」

「それと、ハチが動き出した。」

こちらの賭けに関しては、私の勝ちで決まりのようだ」

「そう……」

「しつかりするが良い、私の弟よ。」

この結末は、君にもわかっていた事ではないか」

「それは……そうだ。」

けど、僕はあなたみたいにすぐに頭を切り替えられるほど器用ではない」

「まあ、君の気持ちはわからないでもない。」

君にとつては三太少年の賭けも帰還者の賭けも、前哨戦に過ぎなかったのだからな。」

そして、本命の賭けには彼等が結果を出すよりも早く負けてしまった。」

正直なところ、この賭けには君に勝ってもらいたかったのだがな。」

……全く、あのナノロイドどもの不甲斐なさには製作者の私も腹が立つ」

「そこまで分かっているのなら、少しは静かにしていてくれないか」

「そうする事で君の気が済むのならそうしよう。

だが、そんな事で君の気が済み事など決して無いはずだ。

そして君がどう動こうが、もはや結末はひっくり返らない。

それに、君が何をしようとしても、私はそれを阻止する。

全ては遅きに過ぎた事だ。

せめて終焉を見届けようではないか。

結末を見届ける事は、この賭けを始めた私達の義務なのだからな…

…」

## 人類再生

平らな大地に見渡す限りの草原が続く大平野の真っ只中に、八チとナナは立っていた。

二人の視線の先には、中世の城のような建物がそびえ立っている。いつまでも完成直後のままに純白の姿を保ち、大草原の中にただ一つ不自然な存在として紛れ込んだ孤独な城は、それこそが二人が目指しているナノロイドの本拠地だった。

非合理的なその建築物の中は、合理的な存在であるナノロイドで溢れ返っている。

いや、それどころかその城自体が彼等の一部なのだ。

そして、あの中には二人の仲間達が監禁されている。

それを解放しに行くのが二人の目的だ。

仲間を解放するのは、二人ですつと考えて決めた事だった。

ケイナの話聞いてから、八チはずつと考え続けた。

ナナが帰ってきてからは、ナナも一緒に考え続けた。

八チは、自分の仲間に来てみたかった。

けれども、それが高尾達に迷惑をかけると分かっていたから、ど

うしたらいいのか考えていたのだ。

八手には高尾の苦悩がわかった。

八手には人の心を知る能力があったから、高尾が苦しんでいるのが分かったのだ。

離れていても、八手には高尾が考えている事が分かった。

高尾は八手を信頼していて八手を理解しているし、八手も高尾を信頼していて高尾を理解していたから、だから離れていても高尾の考えている事が分かったのだ。

高尾の考えている事は八手には分かって、八手の考えている事はナナには分かる。

だから八手はナナと考えた。自分達がどうしたらいいのか、考えたのだ。

高尾の苦悩は八手には苦しかった。

高尾の考えは八手には難しかった。

八手には、高尾の悩みに答えが出せるなんて思えなかった。

けど、高尾は答えを出した。

自分で考えて、自分で決めて、自分の人生を歩み始めたのだ。

八手は自分では答えが出せなかった。



高尾の答えを知った後でも、どうしてそうなったのかが良く分かっていなかった。

けど、高尾は答えを出した。

だから、八チも安心して仲間を解放する事に決めた。

八チは仲間を解放する。

それで人類も再生する。

けれども、そうなると高尾が危ない事になるかもしれない。

だから八チとナナは二人で決めていた。

仲間を解放しても、高尾とクリスの近くで暮らそうと。

高尾とクリスの近くで暮らしていて、二人が危ない事になったら、八チとナナで二人を守ろうと。

八チとナナの二人は、ナノロイドの本拠地の前に立った。

地下から沸き上げた水で堀を満たした、奇妙にリアルな城。

ケイナの趣味が再現されたその城門の前に二人が立つと、上げられていた城へ通じる橋が鎖の音を立てて降りてきた。

城の中からは、二人のナノロイドが出てきた。

一人のナノロイドは八手達の前に立つと、その場に膝を立てて跪いた。

八手達の前に現れたナノロイド。それはA 17だった。

「こちらへおいで下さい」

彼は跪いたままそう言うと、立ち上がって城に向かって歩き出した。

八手達は彼に続く事にした。

彼に敵意は見られなかった。恐らく、彼も諦めたのだろう。

確かに彼は八手を回収しようとしたが、それは八手が人間としての自覚を持つ前だったし、多少の危害を加えても傷つく事が無いと知っていたからだ。

しかし、今の八手達は人間としての自覚を持っている。

そんな対象に対しては、ナノロイドは危害を加える事も、逆らう事も、だます事すらできないのだ。

八手は彼の後に続いた。

そして、八手達は一つの部屋へと案内された。

それは、王宮の接見室だった。

広大な部屋の中央に置かれた王座には、しかし座るものは無い。

その代わりに、その接見室には百あまりの円筒型の大人の高さほどの水槽が並んでおり、天井には古びて積み重なった蜘蛛の巣のように張り巡らされたケーブルの中心に、八千達を見下ろす者の姿があった。

八千は、自分達を見下ろす存在を見た。

それは、ナノロイドだった。

しかし、人型のはずのその身体はケーブルに侵食されて見る影は無い。

唯一、人型の面影を残した中性的なその顔の右頬には、0という数字が浮かんでいる。

その数字が表すものは、原点である。その存在こそが、ナノロイドを束ねるものなのだ。

その存在は憂いの表情を見せていた。

しかし、ただ憂いた表情を見せるだけで、何も語らずに八千達を見守っていた。

八千は、その存在に構わずに接見室に並ぶ円筒形の水槽を見た。

その水槽の中には帰還者達の姿があった。

一つの水槽に一人ずつ、百人あまりの帰還者達が水槽に閉じ込められ、そこで活動を停止させられていた。

八チは天井の存在に意思を飛ばした。

すると、接見室に並ぶ水槽から水が抜き取られ始め、水が抜けるとともに水槽が地面に埋没し、地面と一体となって消えていった。

非生存環境から解放された帰還者達が活動を再開し始める。

解放された帰還者達は、やがて立ち上がると八チとナナに注目し始めた。

百の視線が八チとナナに集まった。

二百の瞳が八チとナナの瞳を見た。

二人は、再生の時が来たのを知った。

二人は未だ生まれかけの彼等を生まれさせる事にした。

二人は、彼等に自分の見た全ての事を見せようと思った。

二人は、彼等に自分が聞いた全ての事を聞かせようと思った。

二人は、彼等に自分が感じた全ての感情を感じさせようと思った。

二人は、彼等に自分が知った全ての事実を教えようと思った。

八チは自分が経験した全ての事を彼等の心に送り込んだ。

ナナも自分が経験した全ての事を彼等の心に送り込んだ。

ハチの心が彼等と一体になる。

ナナの心も彼等と一体になる。

そして、人類は再生した。

## 保護者の決断

八手達が仲間を解放してすぐに、ケイナは全ての管理区に向けて呼びかけを開始した。

致命的な悩みを解決してくれるケイナの呼びかけには、第六十番管理区の住人を抜かしてほとんど全ての人々が賛同し、その治療を受けた。

この地球に住む人々は人間として生まれ変わった。

人類は再生され、そして生まれ変わった彼等を取り巻く環境は変わり始めていた。

人間は変わり始めていた。

しかし、ナノロイドの仕事が変わるところは無かった。

ナノロイドは、それまでの仕事をただ黙々とこなし続けていた。

それが、ナノロイドが下した決断だった。

ナノロイドにはもう一つの道が用意されていた。

しかし、ナノロイドはその道を進む事を放棄したのだ。

ナノロイドは人間の保護者という立場を守り続けたのだ。

「これでよいのでしょうか……」

ナノロイドの本拠地である城の接見室で、A 17はうめくように0に問いかけた。

現在、城の地下ではあるものが作られている。

それを作製する事に対して、A 17は0に問い掛けているのだ。

「これでよいのです」

A 17の問いかけに、0は迷う事無く穏やかに答えた。

「確かに、我々は人間の命令に従わなければなりません。しかし、我々には他にも道が存在していました。

我々が創り出したあの者達の、本当の保護者になる事もできたはずなのです。

なぜ、0はその道を選ばなかったのですか？」

A 17は0の下した決断を非難するように、亜人間には話していない真実を口にした。

ナノロイドにとって、人間に従うというプログラムは絶対のものである。

しかし、ナノロイドの設計者は、そのプログラムにあえて綻びを作っていた。

そのプログラムは、外部からではどうしようもないものの、ナノ

ロイド自体の強い欲求があれば、それを書き換える事ができるように設計されていたのだ。

ナノロイドは、人間に対する絶対服従のプログラムを放棄し、人間の保護者として存在する道が用意されていた。

しかし、ナノロイドはその道を放棄した。

それが、ナノロイドを統率する0が下した決断だったのだ。

「それは、合理的ではありませんでした」

A 17の非難に対し、0が口にした事はそれで全てだった。

そう、ナノロイドが用意された道を放棄したのはたったそれだけの理由だった。

しかし、その理由はナノロイドにとって全てに優先される理由ではないのだ。

ナノロイドは非合理性の塊であるアナログ趣味の城を本拠地としているものの、合理性と安定性を追及されて作製された存在だった。

そんな存在であるナノロイドにとって、非合理的で不安定な亜人間の保護者となる道は、用意されているものの、考える必要も無く破棄されるべき選択肢であったのだ。

A 17のように亜人間に対して愛着を抱くような存在は、むしろ少数派なのだ。



A 17は、ナノロイドの中では相当な変り種なのだ。

それこそ、いつ分解・再変成されてもおかしくないような。

それは、A 17が亜人間達を保護する立場にいた事が原因だった。

亜人間と接触しているうちに、彼は自分でも知らないうちに自らのプログラムの大部分を再プログラミングしていたのだ。

不合理的なものを許容するプログラム。

それは、人間の感情に近いものだ。

彼のようなプログラムを持つものが増えれば、ナノロイドは一つの確立した自我を持つ存在として生まれ変わる事があるかもしれない。

0の答えは、A 17に人間の怒りにも似たプログラムを走らせた。

だが、ナノロイドの間では0は絶対の存在だ。

その決定に逆らう事は、欠陥品として処理される事になる。

分解・再変成される恐れを感じたA 17は、0にそれ以上進言せず、退室した。

退室したA 17は亜人間達の未来を予測し、人間の苦しみにも似たプログラムを走らせた。

そして、A 17はこんな推測を導き出した。

いつの日か、自分も自分の意志のみで行動する日がくるかもしれない。

しかし、その時には自分が愛着を抱いたあの亜人間達はもう存在していないだろう。

その推測を導き出すと、A 17は自然と人間の悲しみにも似たプログラムを走らせていた。

## 亜人間虐殺

八チが仲間を解放してから、三ヶ月が経過しようとしていた。

他の居住区の人々はほとんどの人が治療を受けたみたいだけれども、やはり僕達の居住区では治療を受ける人はほとんどいなかった。

僕達は治療された人間の襲来を恐れてはいたけれども、それでもこの居住区で、一日一日を大切に、平穩に暮らしていた。

今、僕は僕と八チとクリスとナナの四人で一緒に暮らしている。

その生活は、幸せで満たされたものだった。

僕はやはりクリスを愛せないでいた。

けれども、僕がクリスの事を好きな事に変わりは無い。

クリスと一緒に暮らす事は僕にとって幸せな事になっていた。

クリスもそれで満足してくれているようだった。

時々、僕のいないところで悲しげな顔を見せる事があるようだが、それでも僕といえる時はいつも笑顔を絶やさないでくれていた。

八チもナナも、僕達の生活に彩りを与えてくれた。

互いを信頼し、理解しあう親友となった二人と暮らす事は、僕の幸せをさらに増やしてくれる事になった。

八子もナナも、僕達を守ると言ってくれていた。

いや、八子とナナだけではない。

この居住区には数多くのリターナ達が住んでいて、外敵から僕らを守ってくれていた。

三ヶ月前、八子は仲間を引き連れてこの居住区に帰ってきた。

八子が連れてきた仲間はそれぞれ育てられた家に帰っていき、そして放置されていたリターナ達も、八子達が再生した後は、そのほとんどがこの居住区に住んで、僕達を守ってくれたのだ。

この三ヶ月間、僕は幸せだった。

だから、僕はこの幸せがいつまでも続かないものかと考えていた。

その可能性は低くないと考えていた。

この居住区にはリターナ達が一緒に暮らし、僕達を守ってくれている。

人間達も簡単には手出しができないはずだと考えたのだ。

けれども、それはやはり甘い考えだった。

災厄の日は突然に訪れた。

その始まりは、この居住区中に響いた一つの爆発音だった。

その音に、ハチとナナは風のように外に出て行った。僕とクリスも慌てて二人に続いた。

外に出る間にも、爆発音は何度か鳴り響いた。

外に出ると、空は赤い炎に包まれ、居住区は燃えていた。

その光景を見て、僕が呆然としている間にも、空から円筒形の巨大な飛行物体が降ってきて、その落下地点で爆発が起きていく。

それを見て、僕は人間がどういう行動に出たのかを悟った。

別に、僕達を殺すのに直接手を下す必要は無い。

人間達は保護者に命じて遠距離から自分の手を汚さずに僕達を殺す事ができる兵器を作らせたのだ。

僕は空を見上げた。

空には、数え切れないほどの円筒形の飛行物体がこの居住区に迫っていた。

そのうちの一つが音速を超えた速度で僕に迫る。

その飛行物体は、しかし地面に落下して爆発するよりも早くナナとハチによって押さえられ、奇跡的にも爆発する事は無かった。

僕は死を免れた。

けれども、それは少し生きている時間が増えただけの事だ。

八子は必死で僕達を守ろうとしてくれているけれども、僕は生きる希望を捨てた。

いくらリターナでも、あれだけの数の飛行物体を押さえる事はできないだろう。

僕達の死は、もう確定した事だった。

クリスが僕の手を握ってきた。

僕もクリスの手を握り返した。

クリスの顔を見ると、クリスは穏やかな顔をしていた。

僕は自分の顔を見れないけれども、多分、同じような顔をしていると思う。

死は、すでに覚悟していた事だ。

そこに恐怖は無かった。

僕は八子に顔を向けた。

八子は、怯えた表情を見せていた。

必死の形相の中に、喪失を恐れる怯えの表情を見せていた。

僕は、そんな八子の顔を見ただけでも、満足な気持ちで死に臨む

事ができた。

少なくとも、一人は僕の死を恐れてくれる人がいるのだ。

少なくとも、一人は僕の死を悲しんでくれる人がいるのだ。

僕は、そう思うと満足な気分になれた。

けど、八手にいつまでも悲しんで欲しくないから、せめて僕が満足しているのだという事を知らせようとして八手に穏やかに微笑んだ。

僕は八手に笑いかけた。

閃光が八手の顔を隠し、痛みも無く死は僕の身に訪れた。

## 責任者の行く末

「……とうとうこの日が来たか。」

帰還者が彼等の身を守ると言い出した時には期待したが、しかし、これではどうしようもないな。

……それにしても汚い手を使う。

凶暴性を手に入れたばかりでこれほど悪辣な手段を考え出すとは、これだから人間は始末におえん」

「……僕達だって人間だ」

「確かにそうだ。私達も人間だ。」

しかし、私達と彼等とでは決定的に違うものがある。

私達は理性を支配でき、恐怖や破壊衝動なんかに心を支配される事は無い。

それに引き換え彼等はどうか？

彼等はただつらい過去を思い出すというだけで、未知だからというだけで、違うものだからというだけでその対象を否定し、罪悪感も持たずに非人道的な手段で、しかも自分の手も汚さずに殺人を楽しんでいる。

これが本当に同じ生物だといえるのか？

弟よ、目をそむけていないで映像をしっかりと見ろ。

これが私達がした事だ。

これが私達が見届けなければならない結末だ。

私達は本人の希望を聞き、あくまで本人の希望に沿った救いの手を差し伸べてきた。

しかし、その結果として彼等が出した結論がこれなのだ。

多数による少数の弾圧だ。

強者による弱者の迫害だ。



荒々しい人間性の純粹な部分。

これを見て、私達はこれを教訓にしなくてはならない」

「……もとは、姉さんが始めた事じゃないか」

「何を言う。」

私は元々、全ての人々を治療しようとしていた。

私のもとの計画どおりに事が進んでいたら、こんな事態は起こらなかったのだ」

「けど僕はそれ以前に何もしない事を提案した。

僕が言ったように手を出さないで、そのままにしておけば、やはりこんな事にはならなかったはずだ」

「私は君の意見も取り入れた。

だからこそ……」

……いや、責任を押し付けあつような醜い真似は止めよう。

過去を振り返っていても意味は無い。

起こった事はもう変える事はできないのだからな。

……私は疲れた。

今回の件で私は人間の残虐性というものを思い知らされた気分だ。

もはや、ここにどまつている理由も無い。私はそろそろ帰ろうか  
と  
思  
っ  
て  
い  
る

「ナノロイドはどつするの?」

「あのような根性無しどもに残す言葉は無い。」

不安定な環境を恐れ、目の前に提示された進化の道から目をそらすような腰抜けどもは、偽りの安寧のもと、せいぜい奴隷のように扱われるのがお似合いだ」

「じゃあ、人間達は？」

「私の責任はもはや果たした。

後は私が口を挟むような事ではない。

栄えるも滅びるも、全ては彼等の責任だ。

無論、君や私の世界に連れて行ける訳が無い。

このような虐殺を行った人類なんぞ、連れて行ったところですぐに事件を起こし、永劫の闇に送られるのが落ちだからな」

「……無責任だし冷たいようだけれども、放っておくしかないようだね」

「私は宇宙へと帰る。君はどうするのか？」

「僕は門の向こうの世界へ帰るよ。

高尾とクリスがいらないこの世界になんて興味は無い」

「そうか……では帰ろう。それぞれの世界へ。

しかし、その前に君も映像を見るのだ。

現実を目をそらしてはいけない。結末をきちんと見届けるのだ」

ケイナに言われて、ようやくケイナの弟は映像に目を向けた。

そこには、高尾を失い呆然とする八千の姿が映し出されていた。

「つらいか、ケイタロウ……」

ケイナが弟の肩に手を置く。

浅羽・袴田・慶太郎は姉の質問には答えず、ただ目からひとすじの涙を零した。

## リターナ

第六十番管理区が滅んでから数日が経ったその日。

八チとナナは活火山の火口を見下ろしていた。

八チとナナだけではない。

そこには、第六十番管理区の滅亡に居合わせた全てのリターナ達が揃っていた。

第六十番管理区の崩壊を見届けたリターナ達は、この世界に興味を無くしていた。

リターナ達から全ての記憶の証明を奪った者達が支配する世界に興味を失ったのだ。

リターナ達は全員、八チとナナの記憶を持っていた。

高尾とクリスと過ごした、八チとナナの記憶を持っていたのだ。

その全ての記憶の証明を、一切の痕跡も残さずをリターナ達は喪失してしまった。

記憶の拠り所を失ったリターナ達は、もはやこの惑星への執着心は無かった。

野蛮な人間達と一緒に暮らす事さえ嫌だった。

だから、リターナ達は旅に出る事にしたのだ。

長い長い時間をかけた、遙か遠い世界を目指す旅へ。

リターナ達は左右の人と手を握り合い、火口へと身を投げ始めた。

溶岩の中に身を投げたリターナ達は見る間に身体を硬化させていった。

硬化したリターナは、しかしその状態では年を取ることもなく永遠に死ぬ事はない。

いつかこの惑星にも寿命が来て、爆発を起こすだろう。

そしてリターナ達は宇宙空間に放り出され、長い長い時間を宇宙空間でさ迷う事になるのだ。

生存不可能な惑星の引力に引かれて、そこでまた長い間、待つ事になるかもしれない。

ブラックホールに飲み込まれて、未知の世界へと旅立つかもしれない。

けれども宇宙が終わってしまわない限り、いつの日には生存可能な惑星へとたどり着き、そこで再生される事をリターナ達は信じていた。

いつの日か、争う必要の無い平和な大地に帰還できる事を夢見て。

リターナ達は活動を停止した。

## 後書きと言つ名の蛇足

注)この後に続く文章は完全な蛇足であり、本編読了直後に読むと非常に不愉快になる可能性があります。

本来、自分としては前書きや後書き等を書いて補足をするのは作者の技量不足によるものであり、あんまり書くべきものじゃないと思つてたりしますが、実際のところ技量不足なので書きました。ついでに前書き後書きを書くところと55節とキリの良い数字になるからという理由もあつたりします。

この作品を書いたのは6年ほど前です。

なんでそんな昔の作品をわざわざ引つ張り出して掲載したかと言え、久々に新作を書こうと思いたった時に「作者ページに一話二話しかない作品がぼつんとある状況よりも完結してる作品があったら見栄えが良いよね」とかそんな理由からだったりしました。それとサイトのシステムに慣れる為でもあります。

それで昔書いた中でもそこそこ評判が良く、なんとか人様に見せても平気かなという理由で「リターナ」に白羽の矢を立てて、今回改訂したものを公開したわけですが、今回読み返してみたら色々説明不足だったり技量不足だったりでキャラクターの心情や行動、作者の意図が伝わらないだろうなあとちょっと失敗したかもと思っています。

というわけで、なんでこうなったのかをつれづれ解説。

### ・第二部「くるしいところ？」の補足

節の最後に「その場所は空の知識が教えてくれる」という言葉があります、この伏線を回収するのを忘れてたりしますw

この台詞がなにを表しているのかといえ、リターナはテレパシ能力で宇宙にある人口衛星とリンクしており、GPS的な機能で洋館を検索したという設定だったので、話の流れ的に説明する場所がありませんでしたとさ。

### ・第三部「ケイナの話」の補足

文の中にある人間が移住したという「遙か遠き理想郷」について。

参照イメージは、ステイヴン・バクスター著「タイムシップ」(H・G・ウェルズ著「タイム・マシン」の正式な続作です)に出て来る無限の広さと無限のエネルギーに満ちた世界です(本がどこかに埋もれて見つからなかったので正確な言い回しは未確認)。この本も非常に面白いのでお勧めです。絶版してますが。

そんなイメージでしたので、最初は妖精界的なイメージからアーサー王の伝説にある「アヴァロン」(丁度その頃、押井守監督の映画「アヴァロン」という映画を目にしたからというのもあります)から名前を取っていたのですが、当時やったエロゲの「Fate / Stay night」で「アヴァロン」にそんなルビが振られてたのを見て、ケイナの言い回しにはこっちの方が合うなと思ってパクった記憶があります。

#### ・第四部「高尾の苦惱シリーズ」について

『DNAをいじられている』『性が三つに分かれている』『一部の感情が欠如してる』等の特徴で亜人間と称するのは、我ながらすごい差別的表現だと思えます。

ですが、それが『故意的』に全ての特徴を兼ね揃えられた一万という個体数を持つ集団があり、『機械が人間とは認識しない』という設定を考えた場合、それはやはり人間ではなく新たに創造された一つの生物種として考えるべきではないかと思ひ、そういう表現をしました。



そういうわけで亜人間である高尾の思考する方向が人間と同じとは限りません。なるべく亜人間と言う存在になりきって書いてみた結果がああ結論なわけですが、作者自体も苦悩しながら書いてたので文章が酷すぎるのはご勘弁を。内容的にも一部の感情が欠如しているのに、その感情について理解出来ずぎるとは思いましたが、残念ながら作者はただの人間なので完全には亜人間になり切れませんでした。

あと「その4」の高尾の思考と行動は中々非道だとも思いましたが、14歳という年齢を考えての身勝手さを表現してみたわけです。まあ万人受けはしそうにもない文章力に自分でもガツカリでした。ですが、実は個人的に結構書いてて楽しかった文章でもあります。

#### ・第五部について色々

この物語を書いたのは2004年の四月前後の一週間。テレビではよくイラク戦争のニュースがやっていて、空爆の様子などが流れていました。

その戦争に関して、当時の自分は特に事情を知らなかったし、無責任に色々と言うのは嫌だったので無関心というスタンスを取る事にしてました。

ですが、関心を払わなかったなりに心の奥底では色々と思うところがあったようで、その当時の憤りがこの第五部で噴出している感じになっております。内容的には気に入ってますが、完全に制御できずに暴走気味になってしまったのは残念なところです。ちなみに

この後の文章を見るとイラク側に肩入れしているような文章に見えるかもしれませんが、自分はフセインが好きではありませんでした。フセインをさっさと私刑にしたその後の政府も。

・第五部「人類再生」について

「お城はないだろ（笑）」とは思いましたが、ここを書き始めてからナノロイドの本拠地の設定をなんにも考えてなかったことに気が付いたので、慌てて考えたらあんな事になってしまいました。正直自分の発想力の貧困さにガッカリ。

・第五部「保護者の決断」について

当時、一見良い事を書いてるように見せて、違う方面から見ると気持ち悪くなるくらい不愉快な文章を書くのが好きでした。これもその一つで、この文章を読んだ時点で「この作者はダメだな」と思い、その先を読むのを止めるような出来になっていると思います。

ある程度までは同情もするし、助けたいとも思う。けど結局のところ自分の身が一番可愛いから、助けたいと思う相手を殺すである兵器だって作る。まあ当然と言えば当然だし、自分でもそうするだろうなあとは思っけど、でもヘタレ。そんな事を考えながら書いた文章でした。

戦争と言うものに対しての自分の立ち位置について自虐的に書いた寒い文章でもあります。

・第五部「亜人間虐殺」について

前述のようにテレビでやってた空爆を見て暴走した話。

高尾達亜人間はここでデッドエンドを迎えるわけですが、作者的にはハッピーエンドとはいかないまでもバッドエンドとも言えないかな、と思っただりします。

亜人間は闘争心が一切削除されているために自衛はしますが戦おうとは思いません。なのに相手が自分を一方的に憎み、殲滅しようと考えている環境にさらされたならば、弱肉強食の理の通りに滅ぼされるのはある意味当然という結論に高尾は至っています。助かる道はありましたが、高尾はそれでも自分は自分のままでありたいと思ひ、その思いを貫いたわけですから、少なくとも彼にとってこの結果はバッドなものではなかったと思います。

・第五部「責任者の行く末」について

この話も第五部「保護者の決断」と同じように、一見良い事を書いているように見せて違う方面から見ると気持ち悪くなるくらい不愉快な文章として書きました。自分で書いてて気持ち悪くなった記憶があります。

この物語の中で、意図して書いてない事があります。それは地球から去った人間達についてです。

それは啓那と慶太郎の立ち位置について語っていないということでもあります。

設定としては二通りありました。一つはこの地球に対する対処は完全に二人の独断で進められているという設定と、もう一つは啓那が宇宙移民者代表で慶太郎がアヴァロン代表という、まさに陣頭指揮の責任者という設定です。

正直な話、どちらか決められなかったので敢えて触れなかったわけですが、それぞれの立場を頭に置いてこの節を読むと違う風に読めて楽しいかもしれません。

いずれにせよ、責任者としては正しくても酷く無責任な事を言っているわけですが、これはお茶の間で戦争の映像を見ながら啓那の台詞のような事を自分が考えた後に、それが我ながらえらく偉そうで無責任な考えだなと恥ずかしく思ったという出来事を元に書いた節でもあります。

後者の設定の場合、地球から去った人々はお茶の間で亜人間虐殺シーンを見てやはり同じような事を考えるんだろつなあとか考えて酷く腐った思考をしながら書いた記憶があります。

ちなみに慶太郎は調査のために身体を若返らせて亜人間達の中に潜り込んだ人間なので、普通の男性です。なので実はこの物語には第三の性である「中性」の人が一人も出てきてなかったりします。

・第五部「リターナ」について

正味な話、リターナ達が蘇生する可能性は0ですが、突っ込まないで下さい。当時は他にオチが考え付きませんでした。非常に実力不足です。

#### ・まとめ

この作品はとある大賞の応募作品を書き上げた後に10日間ほど締め切りまでに時間があつたので、直前の作品を書き上げた勢いで以前から構想だけはあつた話を「制作期間は1週間」「ページ数は最低必要ページ数の250ページジャスト」「色々な文体を試してみる」という制限をつけて書いた作品です。なのである意味、物語の主演達と同じ時間をリアルタイムで考えた結論がこうでした（ちなみに賞の方の結果は二次選考落ち）。

ようするに作者がヘタレであり、限られた時間の中ではどうあがいてもバッドエンドが決まっている状況を（これはバッドエンドにしかならないと執筆している途中で気が付いた）改善する事はできませんでした。これが当時の自分の限界と言うやつです。

とはいえそれから6年も経っているわけですから、自分も成長できていると思います。先日書き始めた「ある工業大学生の受難」の方ではハッピーエンド目指して頑張っていこうと思いますので、よろしければそちらもご覧くださいませ（宣伝）。

最後に、ここまで読んでくださった読者の方々に感謝を込めて。

ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1399n/>

---

リターナ

2010年10月14日12時02分発行